

コミュニケーション総過程分析のための理論的枠組：現代記号論の思想史的意義(2)

ナカノ, オサム / 中野, 収 / NAKANNO, Osamu

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

69

(終了ページ / End Page)

126

(発行年 / Year)

1963-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00017588>

コミュニケーション総過程分析

のための理論的枠組〔Ⅱ〕

——現代記号論の思想史的意義——

中野 収

五、現代記号論の成立

(Ⅰ) 「現代信号論」の成立の過程を跡付ける場合に、我々は、現代のブルジョア哲学の持つ様々な思想的な特性との複雑な関係を考慮せざるを得ない事実気付く。というのは次のような事情があるからだ。後にくわしくふれることになるのだが、現代におけるブルジョア記号論は例えばモリスの記号論の論理的構成にも明白に看取しうるように、「シンボル動物」(カッシーラー)である人間の操作する「信号」の基本的構造を、例のバヴロフの有名な実験に求めている。そしてこの実験に現れている「信号」の論理を、より複雑なメカニズムを持つ「信号」行動にあてはめながら人間の「信号」理論に構築して行くのである。ここでは、ブルジョア思想の中に伏在している「信号」理論の思想的遺産を意識的に排除しているかの如くである。少なくともブルジョア「信号」理論の思想的系譜はいささかもヴィジブルになっていない。つまり、モリスの「信号」理論を手がかりとしてブルジョア「信号」理論を系譜的に跡づけることは困難のようにも見えるのだ。したがってブルジョア「信号」理論の思想史の意味を

問う場合には我々は、「信号」理論の立場から、その思想的系譜をたどるのではなく、ブルジョア思想の一つの分枝としての「信号」理論に注目し、ブルジョア思想の流れの中で「信号」理論の位置を明確にするという試みをしなければならない。

「現代信号論」が分析哲学という現代ブルジョア哲学の一形態と親しい関係にあるのは周知の事実である。所で、分析哲学というコトバで表示されている現代哲学の一潮流も、実は、簡単な学問的構成ではない。たしかに現代我国で用いられている意味は、ブルジョア思想を大きく、プラグマチズムの哲学、実存主義の哲学、分析哲学に分類して、その上で「分析哲学」として使用されるという意味内容を含んでいる。これはいわば、広義の分析哲学である。狭義の分析哲学は、主としてアングロサクソンの諸国に於ける「言語分析」を主体とする哲学を意味している。これと深い関係を持つものにウィーン学団を中心とする論理実証主義があり、また、プラグマチズムの一部にも分析哲学的な要素がある。^(註一)「現代信号論」^(註二)の立場から言うならば、ブルジョア「信号」理論は、以上のラッセルを中心とする英国の分析哲学、論理実証主義、プラグマチズムとそれぞれ特有の関係を持っているというわけである。勿論、現在この三つの流れが共存しているわけではなく、また歴史的にもこの三派が全く独立に存在していたというわけでもない。正確には、この三つの流れが、一つの大きな潮流となってモリスに至り、一つの論理的帰結をみたというべきだろう。以下ではまず、モリスに至る迄の思想の流れをたどってみる。

(Ⅱ) 分析哲学、論理実証主義、プラグマチズムは先にもふれた如く、形成の過程で、相互に規定し合っているわけであるが、ここでは、簡単にするために、個別に敘述して行く。

(1)、分析哲学——この流れを代表するのは周知の如く、B・ラッセルであり、ワイトゲンシュタインであり、G・E・ムーアである。即ち、ケンブリッジ学派を創った人である。しかし、この三者が、全く同一の哲学理論を構成したというわけではない。

先ずラッセルの理論を簡単に説明してみよう。哲学の学的性格の普遍妥当性をいかにして保証するかということ
が分析哲学の基本的な課題であるのは周知のことである。必ずしも、哲学史は、この事実を物語っていない。むしろ、一つの哲学は常に反対の立場を予想しているといつてよい。一方で、特に自然科学では、一つの理論の真理性が、歴史の進化とともに、増大している傾向がある。ラッセルはこの事実から哲学も、又自然科学の如き方法と対象のとらえ方をする事によって哲学の永遠の課題に応えようと考えた。そうしてラッセルは、哲学の課題を哲学的命題の論理分析であると考えた。そこから導出される哲学上の理論は科学の理論と変わらないと考えた。そして彼は、かかる哲学の方法は如何にして可能かを考えたのである。

ラッセルは、数学の様々な命題が、非常に簡単な形の、少ない命題に還元しうる所から、数学という学問領域以外の領域に於ける様々な命題も単純な命題に還元することに依って、その真偽の判定が可能になると考えた。より正確に言えば、数学の全ての命題を還元しうるような普遍的な構造を持つ論理学を構成しそこで使用される言語及び、その構成は、全ての思想、世界に適用しうるというのである。^(註四)ラッセルは、ここで、ブール等を代表とする十七世紀末に現われた「記号論理学」^(註五)の影響の下にあったといえよう。所でラッセルにとっての最大の課題はかかる論理学の方向はいかにして可能かということであった。そして分析の手始めとして言語に注目する。しかし、このような論理学の基礎になる言語及び、その構成法に対しては、日常言語がそのまま使用にたえるとは考えなかつ

た。日常言語は非常に不完全であると考えた。彼は日常言語から離れて世界に存在する事実を論理的に反映する「記号」群の作製と、論理的な文章構成法を考えたのである。ラッセルは、このようにして、一応は経験主義(註六)から出発しながらも、それを否定的に越えることによって、新しい論理学の構想に至るわけであるが、その過程で「現代記号論」の萌芽をネガティブな形で我々に提出しているのである。(註七) 勿論ラッセルの理論は、記号論に対して大きな意味を持つという意味で、重要なのではない。一九〇〇年代から、一九二〇年代に至るブルジョア哲学の危機の時代に新しい哲学を構想しそこから必然的に、「記号論」が出てくるという意味で重要なのである。

ラッセルが、非常に尖鋭な形でブルジョア哲学の再生を意図したのに対して、ウィットゲンシュタイン、ムーアは多少これと趣きを異にしている。例えばムーアは、ラッセルや、後にのべるラッセルの影響をうけた論理実証主義者とは異って、日常言語の不完全性、あいまい性から、直ちに人工言語、乃至は、人工記号法を考えない。むしろそうした考えに反対であった。命題の曖昧さを日常言語の曖昧さから説明する立場をとらない。分析哲学者が、最も強く反対する形面上学的命題、所謂哲学的命題、逆理が、日常言語によって定式化される場合、意味転化、意味のすりかえに依って成立している事実を指摘してこれを精密に分析すれば、命題の真偽判定は可能であると主張する。(註八) つまり、彼は、ラッセルの如く、厳格な基準に基づく、命題の真偽判定を行なおうとしたのではなく命題の持つ意味が、現実の事象や経験と照合させた場合、妥当であるか否かを、執ように追求したのであった。ムーアのかかる意味分析は後に復活することになる。ムーアは地道に個々の命題を分析し、その真偽の判定をしながら日常言語の誤用、濫用、悪用を指摘した。この基本的立場は、後に「一般意味論」 General Semantics における意味で矮少化された形で継承されて行く。

ウィットゲンシュタインは、ラッセルの弟子に当り、当初は、ラッセルの同じ立場にいるが、後にはこの立場をすてる。文章の意味を文脈・その使用される目的と離れて考えること、あるいは、文章を事実との固定的な対応で考えることを否定し、あいまいな文章や、概念も、全体の文脈の中で有効な意味を持つてば、排除しえないと考えた。このようなある意味でのプラグマチックな考え方は、後にふれる「意味論」 Semantics への影響が大きいと推定される。^(註9)

このような、ムーア、ウィットゲンシュタインの考え方が、後の日常言語学派の形成に大きな影響を与える。

ラッセルの非常に厳格なある意味で偏狭な論理では充分に解明しえない数多くの問題が提出されるに及んで、それらの問題を解決せんとして現われた一つの方向が日常言語学派の持つ方法であった。この派は、命題の分析を日常言語によって行ない、概念の意味を日常言語に依って明かにし、日常言語に於ける表現の論理構造を見出そうとした。こうすることに依って様々の誤解混乱を排除し、誤った哲学命題を排除することが可能になると考えた。誤った命題、間違った概念が作られるのは日常言語の表現の論理からの逸脱の結果が生まれるものと考えた。したがって問題は全て日常言語のレベルで解決のつく問題であって、敢えて人工言語の構想を持ち出す必要を認めないものである。かかる事情を背景にして関心は日常言語の持つ構成の論理に向けられるに至る。

現在、アメリカ・イギリスの分析哲学の主流は、この考え方に連るものであり、そして「現代記号論」の成立に深い影響を与えているものと考えねばならない。現代のブルジョア哲学の危機意識に出発した分析哲学は、「記号論」「現代記号論」に至って一つの頂点に達するわけであるが、その事情は後に再びふれることになる。^(註10)

(2)、論理実証主義——かつて戸坂潤は、自らの研究生生活を始める起点となるべき論究「科学論」の冒頭で次のよ

うな科学論Ⅱ方法論の規定を行なっている。「学問を真に自己のものとしようとする時、方法が吾々にとって問題とならずにはおかない。方法がそれ自身に依って——例えば方法論といふやうな話題に促されてではなく——問題となるのは恐らく、その学問の前途を祝福して野心ある計画を持たうと欲する時とか、それでもなければ、その学問の現状に疑ひを懐いて去就を決し兼ねるやうな場合であらう。」戸坂が(註11)この論文を書いた時戸坂はまだマルクス主義哲学者ではなく、どちらかといえば西欧のブルジョア思想Ⅱ特に新カント派と、それに奇妙な対応の仕方を示している日本のアカデミズム内部の思想あるいは方法に、ある意味での危機意識を持っていた。(註12)この論文で自らに課した問題は外ならぬ自分が研究生活を続ける際に不可欠の論理学の構成であった。換言すれば、一九二〇年代に始まる世界的な動乱の時代に対応する自らを規定する定点の模索でもあった。戸坂は、かかる出発点から、理論的には自らを解放しつつ少なくとも我国の唯物論の思想史の中で特異な地位を占める思想家になって行く。学問の野心ある計画を持ち、また学問の現状に多少の疑いをいだきながらの、方法論の検討は中途での苦難は当然としても一定の幸福な将来が約束されているかもしれない。所が、方法論Ⅱ科学論の検討にはもう一つの動機があるのでなからうか。つまり、既存の思想体系の歴史的な限界性を認めた場合、対抗する異った思想体系の一定の成果を自らの思想体系の中に組み入れ、その過程で対抗思想の中の部分的な限界性を敢て強調しながら、それを相対化し、また自然科学等のある意味では普遍的な性格の科学領域での成果の一部を取り入れながら、その当初に認めた限界点を更に遠くにおしやろうという試みもあるのではなからうか。この場合もまさに科学論方法論が検討され、それは一定の成果として残っている。(註13)以下にふれる論理実証主義から現代のブルジョア記号論への展開の過程はまさに、以上に概括した動機に基づくブルジョア思想の再武装であったといえよう。まさしくそれは、一定の成果を生

み、なかならず、方法論としては一定の鋭さを持つに至った。

以上、前置が長くなったが、簡単に論理実証主義を中心としたブルジョア哲学の展開とそこから派生して来た「現代記号論」にふれてみる。

一九二〇年代の始めごろ、ウィーン大学には、マツハ(註14)以来ひきつがれていた「帰納科学の哲学」の講座があり、ある意味でのブルジョア思想の中の最も急進的(註15)な部分がそこにあったといえる。このような状況の中で、二八年に「マツハ協会」が設立され、ベルリンに於いて発足していた「経験哲学協会」との合同の集会の中から「科学的世界把握——ウィーン学団」なるパンフレットが出来てくることは、当然であったといえよう。

大森莊蔵「分析哲学」(講座近代思想史「疎外の時代(I)」所収 弘文堂)によると「科学的世界把握とは、固定のテーゼを持たず、基本的態度、観点、研究方法によってのみ特性づけられるものである。原理的に人間によって解くことのできない謎というものはあり得ず、伝統的哲学の問題は或いは見かけの問題であり、或いは偽装された経験的命題である。正しい知識は経験的認識によるものに限られ、あらゆる形面上学や先天主義は除かれねばならない。カントのいう先天的綜合判断なるものは存在せず、綜合的命題はすべて経験命題であり、それ以外にはただ論理学と数学の分析命題があるだけである。このような経験主義をこれまでの経験論や実証主義と区別するものは論理分析の方法の意識的な使用であり、この論理分析によってすべての命題の経験的内容を析出する。一方記号論理学の助けによって、歴史的言語に代って新しい中立的言語を構成しそれによって全ての知識を表現し、これらを統一科学の理念の下に体系づける。このようなやり方では、哲学の役割は『哲学的命題』をたてることではなく、ただ命題と概念の意味を明瞭にすることに尽きる。経験科学の領域の上に、またはそれと並んで基礎的普遍的

学問としての哲学は存在しない。」この大森氏の要約からも明かなように論理実証主義は、ある形式での従来のブルジョア科学の全面的な批判克服という意図を持って出発する、新カント派、ブルジョア実証主義、経験主義が、ある意味で見事に批判される。マルクス主義を含めながら、従来の様々なブルジョア思想を批判するわけであるが、注意すべきは、より普遍化された論理学・数学等の自然科学、あるいはそれと密接に関係する学問領域でのある部分的成果によって立つという点で異っていることである。つまりあくまでもそれが階級的視点からの批判でない所に注目せねばならない。しかも記号論、理學に依拠しなから統一科学を企図するというこの意味は、まさに一九二〇年代という危機的状况の中でのブルジョア思想の再編成であり、再武装であったといえよう。

このような企図もさることながら、この「パンフレット」はもう一つの顕著な特徴を持っている。再び、大森氏の論文から引用させてもらう。以下にあげるのは、この「パンフレット」の結語にあたる部分である。

「現代の社会的、経済的な斗争の一方の側は伝来のすでに克服された形而上学と神学を信奉している。しかし、いま一つの新しい時代に向う側は——特に中欧に於いて——それを拒否して経験科学の上に立とうとしている。この新しい動きは、現代ますます機械化されてゆき形而上的思想の余地を狭めつつある生産過程の進歩に密接に関連している。多くの国で大衆は今やますます意識的にこれら形而上学の教義を拒み、その社会的立場から経験論的見解をとるようになった。現代経験論はこの意味で唯物論に取って代りつつある。この科学的世界把握の精神はますます公私の生活、教育、そして建築にまで浸透し、経済、社会生活を合理的基礎の上に導く助けとなっている。科学的世界把握は生に仕え、また生がそれを取り上げるのである。」

この結語に見られる論理で直ちに明かになることは、生に上げた企図に基づく現代経験論は、旧来のブルジョア思想を克服することによって、ブルジョア思想の決定的な批判者であったマルクス主義をも歴史的に相対化するのである。この点に関する限り、それ以前の、そして今日に至る迄マルクス主義批判の思想の常套手段であった、マルクス主義を歴史的に相対化するという手続きを採用している点で、従来の批判と同巧異曲であるという外はない。かかる批判の手続きが部分的に有効である事は今更、いうまでもない事であって、かかる批判をうけることは決してマルクス主義という体系的な思想の持つ決定的な欠陥であるということには決つてならない。更に、この結語に見られるもう一つの特徴は、その末尾に、『生』なる概念が提出されることである。先に引用した大森氏の要約の部分でも明らかな如く、論理実証主義は、従来の哲学なる概念を全面的に否定し、新しい哲学の役割を規定し、それを自らの課題とした。命題と概念の意味を明瞭にする論理実証主義と、『生』に仕え生が要求する現代経験論とは、如何なる関係にあるのか。無限定の『生』^(註17)をとり出すことに依つてこの立場は、ブルジョア思想としての恥部をさらけ出したといえよう。

以上は、多少、詳細にわたつたが、論理実証主義の、より一般的には分析哲学の、そしてここでは、何よりも先ず、「現代記号論」の持つ一般的思想特性を明瞭にする必要があつた。そして、論理実証主義こそ、その思想的特性を最も明確に持っている。そこで、以下、いささか、その思想的な内容に立入つて、その特性を検討し、さらに「現代記号論」との関係をたどつてみよう。

先に見た如く、論理実証主義の思想的出発点には、その一つの成立の契機となるマッハの思想的・学問的成果があつた。マッハの特有な経験主義は、もとより、先の拙稿でふれたイギリス経験主義の影響の下にはありながら尚

又、以後の様々な思想的・学問的成果をふまえることに依って新しく有効性を恢復した経験主義であった。レーニンが、あの時点で批判せざるを得なかった理由も又、そこにあるといえよう。^(註18) 論理実証主義は、この新しい経験主義をより高度に理論化し、それを自己意識化する。即ち論理実証主義は、一般的には、従来の経験主義から、以下の如く、自らを区別する。第一に、従来の経験主義は、事実についての形而上学的虚偽を経験的事実との対応の中で指摘したが、論理実証主義は、形而上学の言語表現を分析してその無意味であることを明かにしようとする。^(註19) 第二には、経験主義は認識手段としては、経験を考える。例えば数学の命題は、経験命題と同様に事象についての命題と考えるが、論理実証主義は、数学の命題では、その真理性は恒真的であって、事象についての命題ではないと考える。したがって数学の命題は全く情報を与えるものではない。^(註20) 論理実証主義では、全ての命題は、真偽が経験上明かなものと、そうでないものとに別かれる。そして後者は、更に、真偽の判定が出来るものと出来ないものとに別れるとする。そして真偽の判定の出来ないものは我々にとって意味のない命題であると考える。論理実証主義は数学・論理学の命題を使うことによって命題の真偽の判定を行なうわけであるが、この命題の真偽の判定（経験上、真偽が必ずしも明かでない命題に対して）こそが経験科学の課題となり我々の知識を豊富にすると主張する。そして、第三に哲学は、かかる知識供給の役割は持たず（その資格がないと考える）これら知識の言語表現の真偽を判定し、それを一層明確化する任務を持つとする。したがって経験主義の主張した哲学の、知識供給の機能は否定し去られる。^(註21)

このような自己規定から、当然のことながら先にのべたラッセルと、論理実証主義の親近性が生じて来る。（ラッセルは、経験命題の分析に数学の基本的命題を適用し、その真理性の検証を行なおうとした。） 正確には、ラッ

セルの持つ特殊な考え方が、論理実証主義の成立の過程に決定的な影響を与えたのである。つまり、ラッセルは、現在の英、米両国に見られる日常言語学派¹¹意味論に与えた影響よりもより大きい影響を論理実証主義に与えているといえよう。

ラッセルと、論理実証主義の関係を2・3の点に関していえば、(1)、ウィーン学団の人々は、自然科学畑の人が多かった。彼らは数学の持つ論理性を、哲学や、他の科学領域にも適用しようとした。そこで、数学は、恒真的な命題を対象とし、事象に関する命題は経験科学の対象であり、経験科学は事象に関する命題を基本的な命題に分割し、数学の基本命題によってその当該命題の真偽を判定する、というラッセルの考え方に非常に身近な要素のあることを知った。(2)、諸科学の分化が著しく、その総合化を指向していた論理実証主義は、人工言語の構成によって諸科学の成果を処理しようとするラッセルを重視した。また(3)、ラッセルは、真なる論理構造を持つ理想言語¹²人工言語を手段として真理分析をするという強力な分析の手段を持っていたので、これは直ちに論理実証主義を奉ずる人々に採用された。以上の如くである。

ウィーン学団の論理実証主義は、ラッセルの理論を導入しながら、より思想史的に見るならば、二十世紀初頭の段階で達していた形式論理学、記号論理学、数学、哲学等々の成果をとり入れながら、概括すると以上のような性格を持った一種の『メタ論理』^(註22)として、あるいは『メタ論理』という形式で、諸科学の統一と、諸科学を支える一定の論理構造を構想した。しかし、先にもふれたようにラッセルの理論体系にはある種の無理があり、そのことは、論理実証主義にも必然的に随伴せざるを得なかった。以下、その点を略述する。論理実証主義(ラッセルの場合も同様)では、全ての社会的、自然的事象は一定の命題の形で表現することが出来、更に、それらの命題は単純

な形式の命題に分割することが出来るとする。そしてかかる命題を「原子的命題」を名付ける。更に、この原子的命題に対応する一定の事実を想定し、それを「原子的事実」と考える。

所で、(1)、このような「原子的命題」乃至は「原子的事実」を言語的に表現することが困難であることがわかる。命題を分解する普遍的な原理がなく、しかもただか、形式論理学に於ける数種類(註²³)の基本的命題の論理構造を、めやすに分解することは、極めて複雑な構造を持つ一般的な命題を対象とする場合は困難であるし、そこには、分解をする主体の恣意が入らざるを得ない。だから、「原子的命題」なり、「原子的事実」は常に独断の産物でしかなくなるおそれがある。(2)、そればかりでなく、例えば基本的命題を導出する数学の命題自体も、そこから、無理にでも、ラッセルの期待する『原子的命題』をとり出すと、非常に貧弱なものになってしまうおそれもあった。つまり、数学の命題ですら、容易には『原子的命題』に還元しえないことが明かになった。更に、普遍的命題を無理して『原子的命題』に還元すると真理性の判断が充分に出来ないような事態も生れた。(3)、以上のような困難性を除去するために、『原子的命題』をあまりにルーズに考えるようになると、一義的でなければならぬはずの命題分類の基準を失うことになってしまう。その結果、ある種の排除したはずの形而上学的命題の復活を許すことになってしまう。(4)、また命題を、ラッセルのように『矛盾命題』・『恒真命題』・『経験的命題』に限定してしまうと、哲学的命題、例えば、このような命題の分類自体を行なう論理の表象である「命題」の持つ性格の処置に困難が生れる。ある意味では致命的な自己懂着におちいってしまうのである。

このような困難性は如何なる事情から生まれたか。まずその点にふれてから、論理実証主義では、その困難性を如何に『克服』したかの問題に入ろう。

論理実証主義は、先にのべた如く、何よりもまず形而上学的命題の排除という動機を持っていた。形而上学の排除自体は、問題ではないが、論理実証主義の持っていたもう一つの動機は反唯物論、なかんずく、反マルクス主義であった。したがって形而上学的命題の中には当然の事ながら、マルクス主義の持つ様々の命題、より広い意味でいえば、弁証法の論理を基礎とする諸命題も入っていた。そのために数学の持つ、あるいは形式論理学の持つ形式性を駆使しながら、文字通りの神学的、形而上学的命題と共に、弁証法的命題をも形而上学的命題として排除しようとしたのである。したがって、弁証法を忌避したことで『原子的命題』なる貧弱な概念を前提せざるを得なかった。一定の社会的・自然的事象を問題とする限り、当然、困難性が生じることになる。このように事象の持つ複雑で、アモルフな性格の論理の前で、自らの貧弱さを露呈せざるを得なかったのだ。そして更に、ここで問題になっている形式性は、文字通り、形式的なものであって、その故に、形式性を遵守する限り、その形式性が自らを制約し、自己懂着におちいらざるを得なくなる底のものなのである。勿論、この場合でも、形式論理学が全く誤謬に外ならないというのではない。後にふれるように、形式論理学は、まさにブルジョア科学の基本的原理として有効性を持つと共に、他方では『人工頭脳』^(註24)の基本的な論理として役に立つ。しかし、問題は論理実証主義が、その形式論理学に溺れ、思想としての純血性^(註25)を保たんがために、ある点で破綻を招来した事実は否定出来ないのである。

さて、いうまでもないが、以上の如き困難性を論理実証主義は、弁証法を導入し、その思想としての特性を喪失しながら解決することはあり得ない。またしても論理実証主義は、ますます進歩した形式論理学、形式主義的数学論、超数学論の成果に、自からの培養基を求めた。以下ではカルナップに於ける困難性の打開を例証^(註26)としてあげる。

カルナップは、経験科学の諸成果の持つ論理構造を明確にするために、これらを一つの公理系の形に整理しよう

とした。そしてこの公理系を一義的な用法を持つ記号体系によって形式化しようとした。公理系の形成のためには、一定の規則をもうけ、それによって困難な命題を排除した。更に、カルナップは、ある一定の命題について語る命題即ち『メタ命題』なる概念を導入し、これによって先にあげた(4)の困難性を克服しようとした。このカルナップの立場は Logical Syntax とよばれている。ところで、このような立場も又、論理実証主義がおちいった隘路とは異なっているが、本質的には同一の困難性に逢著せざるを得なかった。第一に、様々の経験科学の言語化されたものは、カルナップの意向した形式化をかなり許容するのではあるが、日常の言語表現はなかなか形式化が困難である。つまり、日常生活の過程で有意味である、つまり、経験科学とは一応切離された所にある、ある種の命題が、形式化をこぼんだのである。勿論全ての経験科学の、全ての命題が形式化を許容したわけでもなかった。第二に、真偽の判定には、後にくわしくふれる意味論的な概念が必要であるのだが、カルナップは当初これを採用しなかった。こうして形式化はもう一つの困難に逢うわけだが、後に、カルナップは、単一の理論が実は『対象命題』（事象を直接に表象する命題）と『メタ命題』の複合体であるという見解に達し、いくつかの体系を組合せて（ここで体系が複数になって来ること注意しなければなるまい！）この限界をこえようとした。更に、第三に、命題の有意味を、複数の公理系の組合せと対照させて、検証すること、また複数の公理系を認めることで、論理の多様性を認めてしまうことは、形而上学的な命題の復活を許容することになってしまふ。つまり如何なる形而上学的な命題も複数の論理を任意に組合せることによってその有意味性を認めさせることは可能であるから。こうして、絶対的な意味判定、真偽判定の基準がなくなってしまうのである。

以上のような困難性の生ずる所以も、先に論理実証主義の困難性の所以で述べた事と本質的には違ってない。

この派の人々は、勿論以上の困難性の所以を、この論理体系の持つ論理の不整合性に求めて、より鋭い論理性の獲得によって困難性を克服しようとしている。たしかに、困難性は論理の不整合性から来ている。その論理の不整合性は、そもそも論理なるものの成立する社会的・自然的事象、及び、その論理と自らの論理との不整合性に外ならない。それは、論理自体の不整合性ではないはずである。しかるに、論理実証主義は、それを論理自体の不整合性に求めることによって解決し、新しいより困難な隘路におちいつている。従来のマルクス主義の立場からの批判は全てこの点に集中している。この問題に関しては後にふれるが、その意味では、まさにマルクス主義からの批判は当たっているといわねばならない。ただ従来、マルクス主義の立場からの批判はイデオロギー批判に急なあまり、論理実証主義が、問題解決を自らの論理の再編成をしながらも、あるいはそれ故にこそ、ブルジョア思想の一つの中心核とされますその有効性を持つに至っている事実の剔抉には怠慢であったのではなからうか。

ところで、カルナップは、真偽判定のためには意味論的概念の導入を当初は拒否しながらも後には、これを採用せざるを得なくなる。つまり、カルナップまでは、多くの命題の真偽判定には、論理自体の構造を明確にし、その論理を追求することで可能であると考えていた。カルナップも、当初はこの立場から、『メタ命題』を設定することによって命題を重視する立場に立っていたが、後には、命題を構成する基本的単位である言語自体の検討に入つて行かざるを得なかつたのである。^(註27)カルナップは論理実証主義の立場から出発して、結局は、言語 \parallel 記号の持つ構造をとらえながら、それを駆使することで、命題の真偽判定、即ち、分析哲学という『分析』を行なう立場に立つに至る。論理実証主義は、方法論 \parallel 科学論の検討を出発点としたが、そしてこの場合は、諸科学の方法論 \parallel 科学論であったが、この段階に至って自らのための、即ち自己の理論としての、あるいは、科学としての自己の方法論の

検討に移って行く。それも自己の科学の手段の検討に移行するのである。論理実証主義は、大きく迂回しながら、皮肉なことに出発点にもどった形をとるのであるが、その方法論の検討であるところの記号論、乃至意味論は、論理実証主義が当初に想定した諸科学の統一理論を、その予期とは全く異った形で展望することになる。しかも、ムーア、ウィットゲンシュタインの時点で、ラッセルから離れて日常言語の分析を地道に行なっていた英国、米国の日常言語学派と、全く異った方向から交錯することになる。そして更に、この時点で、アメリカに固有の思想の伝統であるプラグマチズムの一部ともオーバー・ラップし、所謂、ブルジョア思想は、意味論・記号論、の中で一つの結節点を結ぶことになる。したがってまた、意味論・記号論が、すぐれてブルジョア的である『コミュニケーション論』の論理構造の主要な環になるという事実も当然といえよう。以下意味論・記号論の成立についてのべて見ようと思う。

(Ⅲ) 意味論というコトバの系譜をたどってみると、フランスの言語学者、ブレアルの創始になることがわかる。ブレアルは、言語学者以外の何ものでもなく、『意味論』は、フランスに於ける言語学の一つの学説にすぎなかった。一つの言語学上の理論として通用しているにすぎない。意味論の語源をたどることは、この理論の思想史的系譜をたどることには決ってならない。今日、ブルジョア科学の中で非常に、ユニークな地位を占めている意味論はこのような語源から一応独立的な系譜を持つことは先にもふれた通りである。現在、特にアメリカで隆盛を見ている意味論には相互に影響し合っている二つの立場がある。

(1)、論理学的意味論——現在、まさに課題となっているカルナップに発する意味論はこの中に含まれている。カ

ルナップは一方で論理実証主義から大きな影響を受けながらも、他方では、彼の逢著した論理実証主義の隘路打開を Tarski の真理の意味論的概念による分析に関する論文に求めて意味論の有効性に到達するわけである。ところで、Tarski は、ポーランド学派の記号論理学者の著しい影響を受けている。ポーランド学派の人々は、このような内容の意味論を「意味論」「科学の意味論」「メタ論理学」「方法論」などと呼んでいる。すでにこのような呼名の中に、当初はそれが、非常に主要な位置をブルジョア科学の中で占めるといふ予想はなかったと推定されるにしても、とにかく、現在の意味論を規定する暗示的な要素を見出しうるのである。こう見て来ると、現在の論理学的意味論は、系譜的には二つの流れの合流点であるとしてよからう。勿論、ポーランド学派の記号論理学も、論理実証主義も全く異った思想体系ではなく、むしろ非常に親近性を持った、二つの思想・学説と考えた方が妥当だろう。一応意味論が独立の科学として認められるようになったのは、前記、Tarski の論文からであり、この論文を起点にして、カルナップは論理実証主義の論理体系の再編成の試みを行ない、モリスは、意味論から更に記号論の体系化に着手するに至るのである。

(2) 経験論の意味論。敢えて思想的な系譜関係をたどれば、ムーア、ウィットゲンシュタインから発する日常言語学派にたどりつくことは出来るのだが、この流派に影響を与えているのはこの外に、プラグマチズムの祖、パースの哲学の一分枝であった意味論がある。パースの意味論のプラグマチックな性格と、日常言語学派から、オグデン・リチャーズに至る顕著な心理学的な特徴とが相乗的な効果を以ってこの派の意味論の性格を規定している。その特性が最も顕著に、あるいはより正確にそして矮小化されて現われたのが『一般意味論』である。この意味論は、言語の呈するデイス・ファンクショナルな現象、あるいはそれに伴う社会的諸現象を言語の正しい用法によつ

て匡正して行こうという立場に立っている。それだけでなく、性急にも、一般的な、社会現象に於ける対立、矛盾、混乱をも、言語用法のデイス・ファンクションに求める結果、社会現象の正しい把握と、その正当な解決を陰ペイする役割り、すなわち、すぐれてイデオロギー的な機能を、社会的には果すことになる、個人的なレベルで考えば、精神分析的な、一種の精神療法の如きものとなる可能性もある。しかし、これも、ハヤカワ等の『一般意味論』の場合にそうであって、例えば、オグデン・リチャーズに見られる記号理論・言語理論は直ちには排斥出来ない洞察をそれ自体として持っている。

以上の二つの傾向は、文字通り傾向であって、相互に異った学説として対立しているわけではない。むしろ相互の影響が著しい。個々の学者は、異った傾向に属する学者・思想家から大きな影響をうけている。したがって以下では、両傾向を別個にではなく、現在、意味論・記号論の最も尖鋭な形で成立させたモリスの記号論の成立過程を中心に、その周辺を洗い、更に、特徴ある、他の学説にもふれるという形で、記号論・意味論の成立を見て行こうと思う。

とはいうものの、分析哲学乃至は現代ブルジョア哲学の一分科として、更にはそれ以上に、ブルジョア諸科学の統一を志向している学派は、第一にあげた傾向を持つ人々であることは事実である。ある意味ではブルジョア哲学の二十世紀に於ける正当な遺産相続者である。

生にもふれた如く、モリスは、Tarski, Carnap と連る分析哲学の中で、その記号論をほぼ完成に近い形で提出している。もっともモリスがパスに私淑しているという事実がある。更にまたモリスはG・H・ミードからも影響をうけている。^(註29)このことは、パスの意味論のプラグマチックな性格が、モリスの記号論と全く無縁ではあり得

ないことを物語っている。それはともかくとして、モリスは、カルナップを受けて、当初は、記号の一般的な理論化を企図したのであった。つまり、彼は、記号論を学問の一分野であるとは考えず、諸科学をくくる統一的な理論体系を創造しようという態度をとったのである。これは論理実証主義、分析哲学以来のブルジョア哲学の共通した志向であるから当然といえよう。だから、記号、乃至は言語に関する諸科学を記号論として統括してそのための有効な方法論をさぐり出すといったものではあくまでもないのであって、まさに経験諸科学の諸成果をくくる統一的な分析理論の創造をねらっていたわけである。

ところで本論文の主要な課題は、現在、アメリカを中心に行なわれているコミュニケーション理論、あるいはマスコミュニケーション論の思想的特性をとく鍵の一つとして「現代記号論」をとらえ、その論理構造とコミュニケーション、マス・コミュニケーション理論とのかかわりあいを見ることにあるのだが、モリスの記号論の内容に入る前に、彼が、記号論をして、全ての経験科学の統一理論たらしめようとした意図を跡づけるために、分析哲学の一派としての彼の意味論＝記号論の構成に簡単にふれよう。

モリスは、『記号』を『言語』より広い概念と考え、人間にも動物にも共通に存在するものとする。^(註30)そしてある「物理現象」が『記号』として機能する過程を、『記号過程』と考え、それは三つの要因により構成されるとする。即ち、『記号』の『解釈者』、『記号媒体』、『記号』の『指示体』である。『記号媒体』は、様々の物体、現象を含み、ある場合には、相互に論理的に関連している。モリスは、『記号媒体』同志の関係を構文論的關係、『記号媒体』と『指示体』との関係を意味論的關係、『解釈者』と『記号媒体』との関係を語用論的關係と考えた。そして構文論的關係を取扱うのが、『構文論』、意味論的關係と、この意味論的關係に依存している構文論的關係を共に

取扱うのが『意味論』、語用論的關係と、これに依存する構文論的關係、意味論的關係を共に取扱うのが『語用論』であるとする。『記号論』の問題領域は、この三つの問題領域に限定されると考える。以上の説明でも明瞭のように、解釈者を認識主体、『指示体』を認識の指向する客体、『記号媒体』を、この主体と客体をリンクするものと考えれば、この構造は従来の哲学及び経験諸科学の持つ論理学を包摂することが出来る。しかも、三つの要素を相せながら、各関係をも論じうる問題領域を設定することに依って、モリスは明かに諸科学を総括する理論を志向し互に連関させていた。^(註31)

モリスの理論を特色づける要因はこの外にもう一つある。それは、彼が当初にとった行動主義的な立場に外ならない。その点に多少、立入ってみよう。一般に、『言語活動』という現象は——思想もそうなのだが——あくまでも人間の行動であり、行為に外ならない。したがって、『言語』を対象とする学問は、従来は、次のような二つの領域に分れていた。

- 一、言語行動の規範や、その使用の規則を主として対象とする学問として、——メタ論理学、構文論、意味論。
- 二、言語行動自体に内包している論理、あるいは、言語の使用自体の持つ論理を対象とする学問として——語用論・(パヴロフ)記号の理論・言語心理学(あるいは心理学の一領域)。

従来は、この両者は、全く別個の学問領域を形成すると考えられていた。両者を対象とする理論体系は本質的に異なるものと考えられていた。そして、論理実証主義は、さし当り前者を自らの課題としていた。分析哲学といわれるより広い立場でも前者が最大の関心事であった。モリスの理論で、ユニークであるのは、この二つの問題領域を、体系化された一つの論理によって取扱おうとした所である。モリスは、その記号の理論に於いて、従来の心理

学的言語理論が、決して取扱おうとはしなかった領域も取扱う。従来の心理学的言語理論Ⅱ記号論は、本来の対象を『言語行動』にだけ限定し、たかだかその使用の論理を追うだけであった。特に、心理学にひきつけられた記号の理論では、心理過程のもつ論理構造と、記号の論理を全く混同してしまうことすらあった。モリスは先ず、言語行動の心理と、記号の論理を峻別しなければならぬと考えた。そしてそのために行動主義の立場をとらねばならないとする。少なくとも行動主義の立場に立つことに依って記号行動の心理と、記号の論理の関係を明かに出来るような地点に立ったということが出来よう。モリスは、行動主義を採用することに依って、彼自身の記号論を心理学的なものとして構築するが、悪しき心理学主義からは自由になることが出来た。つまり、モリスの記号論は『記号媒体』Ⅱ記号と、『解釈者』Ⅱ認識主体（心理）を対応させながら『記号』の持つ論理構造を分析し、命題の意味分析に使用される道具としての言語記号に論理的考察を加えた。そして、従来の論理実証主義Ⅱ分析哲学の弱点であった記号論Ⅱ意味論の基礎を構築した。

しかし、そればかりではなかった。彼の記号論が、従来相入れないものとされていた記号の論理と『解釈者』との関係の論理構造を明確にしたことは、論理実証主義Ⅱ分析哲学への貢献だけではなかった。主体と客体をつなぐ、媒介項と、主体の持つ思考過程Ⅱ心理とを連関させたということは、ある意味での「認識論」の形成を意味していた。のみならず事の当否はともかくとして、従来は哲学の一分野にすぎなかった認識論をこえる（ブルジョア的意味以外の何ものでもないのだが）要因をはらんでいた。それ故にこそ、モリスは、様々な経験諸科学にむかえられたのであった。例えば、コミュニケーション過程に於ける象徴シンボルの機能の分析に大いに役立ったのである。註(32)また、人間が、シンボル動物である限り、シンボルⅡ記号の分析は、部分的に人間行動の分析に役立った。

また、先にふれたように、モリスはある意味では、アメリカ固有の哲学—プラグマチズムの伝統を負う一人である。というのは、彼が、パースに私淑していたという事実もさることながら、直接には、G・H・ミードから非常に大きな影響を受けていると推定することが出来る。つまり、ミードの理論の主要な環を成す社会過程に於ける信号の意味、及びその機能の理論からの影響が見られるのである。^(註33)したがって、モリスを通じて、その記号論の中にミードを取込むことによって社会過程の分析にも有効性を持つという側面があるのではないか。

もう一つ、モリスの理論の形成の契機に、彼の理論自体に内的に連関するものではないのだが、一九三〇年代に始まる全体主義（勿論ソ連も含まれていたことだろう！）に対する危機意識があったと思われる。空しいシンボルによって操作される全体主義下の民衆と、そのことによって自らの正当性を保証しえたと考えていた全体主義者及び、それらを含む全体主義という体制それ自体に対する危機意識が。

モリスが、行動主義の立場をとったのは対照的に、心理主義的な立場をとったのは、オグデンであり、リチャーズであった。先の分類の中では、モリスと対照的であるという点から、第二の分類の中に入っていたが、第二分類の中で、『一般意味論』など同日に談ぜられない要素を持っているのが、彼らの所説である。「記号行動」を構成する三つの契機を認める点でまさにモリスに酷似しているのであるが、彼らはこの三契機の因果関係を執拗を追求している。モリスが、三契機を単なる関係として、叙述してことと好対照を成している。モリスに先行していた彼らが、その記号を構成する三契機という着想から、記号論自体については、モリスに大きな影響を与えたであろうことは想像に難くない。^(註34)彼らの理論形成の動機は、直接にはモリスに於けるが如き論理実証主義Ⅱ分析哲学の理論的危機ではなかったと考えられる。むしろ直接のそれは、有名なパヴロフの行った実験及び、その生理学的な信

号理論ではなからうか。パヴロフの実験及び、信号理論は、ある意味では、ブルジョアの認識論の危機を招来したといつても過言ではなからう。というのは、マルクスによって、「思想の現実的基礎」と規定された「言語」、そしてまたブルジョアの認識論に於いてすら、思考の、認識の基本的な手段であり、また思考、認識それ自体と考えられていた「言語」に対して、パヴロフは、その唯物論基礎の確認を行なったわけである。マルクス主義の認識論が、今日の段階でも完全に説得的であるということは性急にはいえないにしろ、認識の基本的な手段が、パヴロフの規定した第一次、第二次信号系であるという事実を否定しえない。だからして、一九世紀末から、二十世紀初頭にかけて論理学の課題として言語学の理論は、記号の理論に形態転化する。(勿論従来の言語学の存在理由がなくなったわけではない。)このようにして、ブルジョア認識論の危機は、新しい論理学の形成、(その中で記号論が中心的役割を演じたことは今迄に見て来た通りである。)という形で克服されようとした。例えばモリスにとって最大の課題は、新しい論理学の構築であった。この点で、オグデン、リチャーズの場合は、多少、問題の規模は小さく、むしろブルジョア言語理論の論理化と、敢ていえば、その再編成が彼等の最大の課題となっている。モリスにしろ、オグデン、リチャーズにしろ、その理論の前提には当然の事ながら、否定しえない普遍的な真理であるパヴロフの理論をもって来なければならなかった。しかし、後にのべるようにパヴロフの導入の仕方は、極めて恣意的であつて、文字通り、理論展開の導入部に使用されているにすぎない。ある人々は、この事実をさしてパヴロフの矮小化であり、観念論化であるといつて批判する。その批判は当然であつて、オグデン、リチャーズは、パヴロフの生理学的な理論を、直ちに人間心理のレベルに移してその唯物論的色彩、つまりまさに正当な理論を稀釈化してしまう。換言すれば、そこで観念論に転落してしまう。彼らは、記号の惹起する、あるいは励起する主体の内的過

程を重視し記号と主体の相互的な関係を軽視する。モリスも、この点全く同様で、パヴロフの理論を出発点におくことに依って逆に、パヴロフの指摘した人間と動物の間の境界が不可視になってしまふ。総じて、ブルジョア認識論・論理学・記号論は、導入部にパヴロフを使いながら、後の展開で、心理学、記号論理学、数学等々と野合し、まさにそのことに依ってブルジョア思想として自らを完成したといえよう。

更に、このような学問的姿勢が最も顕著に現われてくるのは、それが論理実証主義や、分析哲学、あるいは又、記号論・意味論がまがりなりにも持っていた新しい論理学の構想という、アカデミックな、そして同時に「野心的な」動機を喪失して、対症療法的、換言すれば、卑俗な意味でのプラグマチックな目標を設定した場合である。本来、かかる論理体系が、プラグマチックな領域に適用されれば、卑俗な内容しか持ち得ないのだといえ、それまでの話なのだが、ともかくも、ここで言いたいのは「一般意味論」の思想性のことなのだ。先にもしばしば、ふれたように、一般意味論こそかかる記号論、より広く言って今迄のべて来た思想体系の中の最も急進的な部分である意味ではその恥部を最も拡大して示しているといえよう。一般にいわれている記号論、意味論では、一般意味論は殆ど無視されているのだが、正当派意味論、記号論のメタルの裏側には、やはり一般意味論があるといえよう。論理実証主義がある意味で行きづまり、分析哲学一般が重大な危機に、直面した時にそれらはアメリカという思想的風土の中で一つの解決の諸口を見出すことになる。それは、たしかに普遍的な様々の諸科学の成果が出揃って、この哲学の再建に力をかけたという側面を否定するわけではないが、他方、分析哲学が、その活路をアメリカで見出したという事実もまた否定しえないと思う。時期的にいえば、一方で社会主義革命を成功させたソ連は着々と新しい社会を建設しつつあったし、他方では、帝国主義列強間の矛盾がその解決を戦争に見出しつつある中で、

アメリカが、資本主義の陣営を代表する最強国になりつつある時であった。そしてそのことが、一般意味論を展開させた一つの要因であった。そこで、あのある意味で思弁的であった論理実証主義に極めてプラグマチックの活力を注入しえたアメリカの思想的国土の一端にふれて、次の問題に移ろう。

ということは、ここで、アメリカのプラグマチズムを紹介してその思想的特性にふれねばならないことになるわけであるが、プラグマチズムと、アメリカで展開されたコミュニケーション論の関係は、別の機会に譲るとして、ここでは現在行なわれている意味論・記号論の萌芽が、外ならぬモリスの私淑したパースの思想の中に見出しうるということ指摘しておこう。つまり先の一般意味論とパースが無縁ではないのである。

パースには、周知の「プラグマチズムの守則」 Pragmatism Maxim (註55) なるものである。これはパースの論理学のスケッチであって、例によって自然科学、特に数学の論理の厳密性と、明証性にならって科学一般の論理を構想したものである。パースはいう。真の意味の科学は、知的に有意義なものであって、尚又、人々の経験によって検証可能な命題によって理論構成がなされねばならない。ひるがえって今迄の哲学、神学、形而上学を見るとそれらの命題は、無意味で、不合理であるものが多い。だから、その中から本当の科学の観察方法によって検証が可能であり、研究の対象になりうるものだけを残さねばならない。その残ったものだけで真の科学が構成される。そして、全ての科学者・研究者が窮極に於いて一致しうるような言明が可能になるような普遍的な真理に我々は到達すべきである、として、科学の探求に於ける最も正しい普遍的な方法を提出する。その提案は、一般的な思考法則を対象とする論理学に関するものであった。所で、パースによると、全ての人間の認識過程、思考過程は、まさに「記号過程」である。したがって思考法則を対象とする論理学は「記号論」の性格を持つことになる。

かかる「記号論」の萌芽が、行きずまった論理実証主義の活路になるのは、ミード・モリスの時点に到ってであることは、先にものべた通りである。そして更にいえば、パースがその「守則」の中でしばしば強調するプラグマチックであらねばならぬという考え方が、その行きずまりを、最も基本的な構成要件である『記号』の分析から始めることによって打開しようという動きの重要な支点となったと考えてよからう。そして、このパースの「守則」の中には、ミード・モリスの如く、思想的にはある意味で深みのある論理体系を予想させる要素を持つと同時に、他方では一般意味論の如き、卑俗な実用主義をも許容する要因が潜んでいると考えるのは、著しく妥当性を欠いているとはいえないだろう。

六 現代記号論論の構造

現代のブルジョア記号論が、あるいは、意味論が、如何なる学問的・思想的要請の下に成立したかは、一応、先に概括した通りである。しかも、記号論・意味論が今日、かなりの注目を浴びていることの意味は、それらがかかるとる要請を部分的に満たしながら、実はそれ以上の、科学論としての展望を開いたという点にある。つまり、行きずまった分析哲学・論理実証主義の隘路打開という役割を果すだけでなく、総体としてのブルジョア認識論の再編成という役割をも担うことになる。その意味でブルジョア諸科学の統一的な論理学の再構成をも展望しうる地点を設定するそのことの意味内容は、現在ブルジョア諸科学の基本的な方法論の一面を形成していることからも明瞭だろう。^(註36)

このような事情は、特に、コミュニケーション理論という領域に著しいといえる。というのは、例えば法現象を、総体としてその対象領域とする法律学に於いて、記号論・意味論が、各種命題の分析にブルジョア的な意味で一定の有効性を持ち、且、現状で、法社会学が、かかる意味分析にのみ対象を限定して来ているという傾向に比べ、法現象は、たとえそれにとって外在的な要因をとり去ってしまった後にも、尚、記号・意味とは異った要因を持ちうる。しかし、コミュニケーション現象は外在的要因をとり去ると、残ったものはまさに、記号・意味の運動形態以外の何ものでもない。つまり、コミュニケーション理論にあっては、その対象と方法の中に、記号・意味が遍在するのである。とすれば、現在の各種のコミュニケーション理論の中で、記号論・意味論の持っている意義の外に、この両者の関係は非常に密接であることに気付く。しかし、その対象と方法の中に記号・意味が遍在するという事実は、一面でコミュニケーション理論と、記号論・意味論の親近性を想定させるが、記号論・意味論がともあれ、ブルジョア諸科学の方法論の反省から生れたという閉鎖性は、他面では、記号論・意味論をコミュニケーション理論の中に導入する際の障害要因になることもまた容易に想像される。^(註37)

以下では、記号論と意味論という視点から、その論理構造を概括し、コミュニケーション理論との接点をさぐって見る。

(I) 心理主義的記号論、——心理主義的記号論の最も代表的な著作は、周知の如く、オグデンと、リチャーズの共著になる「意味の意味」であろう。C. K. Ogden I. A. Richard “Meaning of Meaning” 彼らはパヴロ

フの実験を参考にしながら一般的な記号行動は、三つの要素から成立していると考えられる。^(註38) 即ち、

- (1) 記号を操作する主体の内部の過程 mental process
- (2) 記号 sign
- (3) 記号の指示する対象 referent

である。一般に、記号は一種の物理現象であり、また記号の指示する対象も物理現象である。この全く独立の物理現象の間に帰属関係が成立するための条件は何か。オグデン||リチャーズは、人間の心理過程そのものが両者を媒介すると考える。この意味で、彼らの所説は心理主義と呼ばれるわけである。パヴロフは、例の実験に於いて、ベルが、犬に食事と同一の反応をもたらした時に、それを新しい条件反射の組合わせの成立と考えた。そこで、オグデン||リチャーズにあっては、新しい複数の物理現象間の帰属関係の成立の根拠を主体の内的な過程に求めたのである。パヴロフは犬を対象とする実験の場合であるので、犬の高次神経活動と規定することが出来、しかもその物的根拠は明白であった。しかし、オグデン||リチャーズの場合は、新しい記号の成立を考える場合に、動物のみならず人間をも対象としているために両物理現象間の帰属関係の物的根拠を容易に規定しえなくなった。そこで、高次神経活動は、よりあいまいな心理現象||過程となり、高次神経活動の中の新しい組合わせは、漠然とした記憶という概念に置換せざるを得なかった。

二つの物理現象の間に帰属関係があるのみであって、オグデン||リチャーズは、この関係を指示作用と呼んだ。したがってこの両者の間には、本来的に因果関係はないものと考えられる。記号と、対象との結合||帰属関係は常に、心理過程を媒介することに依ってはじめて成立する。

所でこれに対して、記号と心理過程との間の関係はどうか。一般に、記号は物理現象であるが、それは、常に一定の刺戟要因となつて、心理過程に主体の一定の反応を惹起する。これを、彼等は、心理的な因果関係と考える。^(註39)しかし、これは正確には因果関係というような性質のものではないだろう。刺戟反応の關係は、論理的な關係としての因果關係ではない。それは經驗的な結合關係にすぎないと思う。

更に、対象と心理過程の間には、一定の刺戟・反応の過程から、常に一定の対象が想定されて来るという意味で、彼らは、これをも先とは異つた意味での心理的な因果關係と考へた。これも、又、同様の事情で、まさに經驗的な事實であつて、コトバの正しい意味での因果關係とはいえない。經驗的な結合關係である。がそれはともかくとして、彼らは、心理過程を中心にして、二重の心理的因果關係(正確には結合關係)があつて、この關係の二重性によつてはじめて記号と、対象との間に歸屬關係が成立すると考へたのである。このように要約して見ると誰しも氣付くことながら、実は、この記号過程の全構造は、二重の異つた關係から成立しているのである。即ち、第一のそれは異つた心理的因果關係とはいうものの実は、まさに記号に反応する主体内部の過程に外ならないところの二段の、それら自体が、因果關係にある二つの心理的因果關係であり、第二の關係は、この二つの心理的因果關係に条件づけられた、記号と対象の間の歸屬關係である。つまり、主体内部に於いて行なわれる過程と、主体外部に存在する連関である。彼らは、前者を内部連関 *mental context*、後者を外部連関 *external context* と名付けた。しかも彼らは、ある物理現象が、記号としての役割を果す所以を、仮に、記号と、対象の間の外部連関が、対象の不在という形で成立していない場合も、記号が常に内部連関を励起することに求めている。彼らの心理主義の特徴が最も明確に現われてくるのはこの点であるといえよう。彼らの記号論の基本的な論理構造は以上のようなもので

あるが様々な問題点がある。その主なものを二、三拾ってみよう。

先に、しばしばふれた如く、彼らは、直接には一九二〇年代に於けるブルジョア哲学・認識論の危機を、方法意識といったレベルの問題としてとらえていなかった。むしろ直接には、パヴロフの実験に誘発されたブルジョア生理学、言語学、部分的な認識論の危機という形でとらえたにすぎなかったと推定される。したがって本論文の次の論稿でくわしくふれるつもりでいるパヴロフに於ける信号系理論の一部を土台にして、むしろパヴロフから離れた地点で記号論の体系化を試みるという結果になってしまった。結果から見れば、非常に性急にパヴロフ理論を人間の記号・言語に適用しうるものに改竄して、人畜に共に普遍的に成り立つという意味で抽象的になってしまっている。つまり、動物に於ける記号によって、人間に於ける記号をアナロジカルに表現したにすぎないということなのである。だから、後にモリスの所でふれるように、ブルジョア哲学、あるいは諸経験科学の方法に鋭く喰い込んでいるという形での記号論にはなりえなかった。

更に、彼らが記述した記号論の基本的論理、より正確に言えば、記号過程構造の論理は、与えられた記号にはじまり、対象が、主体にとって一定の有意義の存在となることに依って終るといふ単純な構成を持っている。つまり、記号に始まり、対象で終る論理と考えられる。記号が、犬に特定の刺戟・反応の過程を作らせたというだけの意味でならばまさに記号の基本構造はその通りなのだ。しかし、実際の人間の記号過程は、これ程に簡単な構成をとっていない。というのは、主体は、常に記号に反応するだけのものではない。主体は、積極的に記号を操作するものである。当然の事なのだが、主体は記号及びその一定の組合わせによって一定の意味内容を他の主体に伝達しているのである。対象という外在的な事実を背景にふまえながら、ある種の記号を伝達して、まさに先にあげた記

号過程を惹起させようという積極的な行動をする。この場合の記号は、彼らの考えた基本的な過程を前提として、意味内容を伝達する手段となっている。また、対象と主体との関係は、彼らのいった心理的因果関係だけではない。換言すれば、彼らが、主体を単に心理過程のみに限定したことから、全記号過程を構成する主動因を心理的なものに求めざるを得なくなったわけであるが、主体はかかる心理過程のみを構成要因としているだけではないのである。主体と対象との関係は、心理的な因果関係を一部分として含むより力動的な関係である。特に人間の場合主体の、容体としての対象への働きかけが新らしい記号の発生の主要な原因になっている。このことは、実は主体と記号との間にもいえることであって、その点は先にも述べた通りである。彼らは、又、記号と主体、対象と主体の間の二つの心理的因果関係を一応異ったものと考えていたが、実は、対象そのものによる心理過程の励起も当然ありうるし、先にものべた主体と記号との相互作用を考えると、この二つの心理的因果関係が、範疇的に区分すべきか否か疑問になってくる。というのは、実は、二つのそれぞれの因果関係がそれ程、簡単な構造を持つものではないということなのである。仮に、心理学的なレベルと限定したにしても、とにかく、オグデン・リチャーズは非常に簡単な記号過程を図式化して、極く抽象的にその構造をとらえてみせたわけであるが、この簡単な構造の諸部分すら、彼らの説明を十分とは認め難い意味を持っているということは否定出来ない。

とはいえ、彼らの理論の中には、彼らが、心理主義の立場に立っていたという理由で他の記号論には認められないユニークな点がないわけではない。というのは、先にあげた、記号過程を、実は、二の要因でとらえているではないかとすら思われる内部連関と外部連関の対比である。換言すれば記号過程を内部連関そのものと考えたということである。もつといえば、内部連関の相対的な独自性を認めたことである。ということは、対象が不在の場合も

記号と主体との間に充分な意味の過程が成立するという意味でもあるだろう。つまり、ある種の記号過程は、主体と記号の間の相互作用であるということなのだ。これこそ、人間の認識活動であり、思考活動に外ならない。オグデンリチャーズの敘述からは、これ以上の論究は期待出来ないのであるが、仮に、内部連関をこれ程に重視したとすれば、そのことは我々にとって極めて示唆的である。というのは、この内部連関の論理は、コミュニケーション理論に於ける受容過程の論理に外ならないからである。また、彼らの場合、この内部連関も、その論理自体は単線構造を成しているわけだが、これを複線構造に改編することが可能になれば、それこそ、まさしく認識論であり、思考の論理になる。

最後に、彼らの理論の最大の難点であり、それ故にこの記号論が、ブルジョア記号論の正統的な系譜の中に必らずしも入ることの出来ない理由でもある点にふれねばならない。おそらく、彼らにしても、人間を当面の対象とする限り、当然のことながら、複数の記号を考慮したであろう。ということは複数の対象が存在するのは極めて常識的なことなのである。所で、対象が複数であるということは、その中のいくつかは何らかの關係を持っている。一般に対象の集合、即ち存在それ自体は、体系的なものであり、まさに集合としての一定の論理を持っている。対象は一つの論理的な構成体であるはずだ。ということは、この対象を指示する記号群は一定の論理的な連関を持っているはずだ。大変まわりくどい敘述であったが、記号は、人間の認識活動を媒介しながら、存在の論理を反映し、その論理を表示する唯一の手段なのである。つまり、彼らの欠陥は記号と対象との關係を単純な表示 \parallel 指示作用としか考え得なかった所にある。そこから彼らは記号の機能自体を縮少してしまった。勿論、彼らにしてみれば、記号過程の基本的な構造の論理化が、主要な課題であったというのかもしれない。しかし、仮にそうだと

もかかる原理的な敘述は、それ故にこそ記号過程の持つ様々なファクターを包含しているのが当然だろう。それはともかくとして、記号が実は、彼らの考える以上に非常に様々な機能を持つことはもはや否定しえない。記号が様々な機能を持つことは、更めて、行動主義の記号論の所でふれるとして、とにかく、彼らが、記号の主要な機能を唯一つ、つまり刺戟・反応の機能に求めたことが、彼らの理論の限界性であったことを確認しておこう。

勿論、彼らも、機能をただそれだけだとわしたけではない。というのは彼らは、記号の種類を二つに分けてい(註40)る。一つは論理的な記号であり、他方は、情緒的な記号である。「情緒的な記号」というのは何ら、外的なあるものを指示せず、何らかの主体の意志や、感情を表示しているにすぎないものである。その種の記号は、記号過程の中では、記号を刺戟として受けた主体の情緒や、意志を誘発するか、行動を促進させたり、遅滞させたりするにすぎない。これに対して「論理的な記号」というのは、常に対象を指示している。また、必ずしも外的な具象物を指示していなくとも、経験的なある種の論理や、一定の約束を表示しているものもこの種類である。所で、一般にある特定の記号が、いずれの分類に属するかは容易に極め難い。一つの記号が、ある文脈の中ではいずれの分類にも所属しうることにすらある。ということは、記号が本来的にいずれかの分類に属しているというのではなく、以上のことはまさに機能の分類なのである。とすれば、直ちに、果して記号の機能はこのような二種類の分類で考えるものなのか、という疑問をいだかざるを得なくなる。また更に、果して、対象を指示しているか否かが、唯一の分類であるかどうか、もつといえ、ば、「情緒的記号」は指示すべき対象を持たないといえるのか。つまり「情緒的記号」が、主体の情緒・意志を表現するものであるというならば、何故、その際的情绪・意志は対象たり得ないのか。たしかに当初に於ける対象とは異っているが、主体自体に完全に所属しているからといって先の対象から情緒

・意志を区別する客観的な根拠は何か。以上の如き疑問は当然起ってくると思う。オグデンリチャーズが、記号過程を構成する三要素として対象・記号・心理過程を上げた時に、対象・記号を一応は実体化しながら、心理過程だけは実体化せず、あく迄も過程としてしかいていないことに更めて注目しなければならぬ。筆者はそれを強引に主体として、実体化して考えて来た。そのわけは、彼らの論理を出来るだけこちら側に引きつけて考えて見るという意向があったからなのである。しかし、彼の所説は、文字通りとることによってその限界性がますます明確になる態のものではなからうか。

オグデンリチャーズは、記号と言語の境界を明確に規定していないが、少なくともブルジョア記号論に於いては記号と言語の同一視という点が一つの特徴となっていると考えた方が正鵠を射ている。したがってこれらの考え方の中でも常に、記号が論究された後に、言語理論が登場するが、むしろ、言語理論は、彼らの記号論の中である意味では十分に論じ尽されていると見てよい。このことは、ラッセルや、ウィーン学団の論理実証主義に於いて命題分析のための人工言語が考察された事実からも明らかである。ここでいう人工言語は、文字通り、人工の記号体系に外ならない。それは、記号の基本的論理をとり入れながら、自然言語の曖昧さを除去し、一義的な使用規則を持ったものにしてしようとする試みであった。もはや、そこでは言語の独自性は記号一般の持つ普遍的性格に解消されている。結局、モリスをも含めて、ブルジョア記号論は、直ちにブルジョア言語理論になる。勿論、ここで従来の言語学の諸理論の一部は除外している。

心理主義記号論の立場に立つ人々もこの外にいるが、この立場での記号論の諸特徴を最も典型的に示し、しかも、現代記号論の一つの非常に基礎的な前提を提出したという意味で、オグデンリチャーズにそれを代表させた。

以下では、この心理主義に対して行動主義の立場での記号論に簡単にふれる。

(II) 行動主義記号論——モリス Charles Morris が、有名な著作、「記号・言語・行動」『Sign, Language and Behaviour』にとりかかった時の主体的な条件は、第五節で述べた通りである。その際の彼が持っていたと推定された危機意識が深いだけそれだけ、彼の理論的出発点は、極めて原理的なものであった。それはタルスキ・カルナップに依って行きづまったブルジョア論理学・認識論の打開という容易ならぬ課題であり、しかも、モリスはその課題に直接応ずるためにこそ、各種記号体系の基本構造の分析から出発しなければならなかったのである。

以下、「記号・言語・行動」の持つ基本的論理を追ってみよう。

モリスは、次のような記号の定義から出発する。即ち「ある事柄Aが一定の行動族の反応系列を促す刺激物が存在していない場合にある有機体に対して、それが、この行動族の反応系列によってもたらされる一定の状態の下で反応するような傾向を持つようにする予備的刺戟となるような場合に、このAは記号である。」^(註41)と考える。モリスが行動主義である、といわれる所以は、すでにこの定義で明かである。というのは、記号は、一定の行動の予備的刺戟でありそこでは一定の反応の行動が常に密接に結びつけられている。もはや、オグデン・リチャーズのいう内面的な過程反応だけが問題ではなくなっている。所でモリスは、具体的な記号過程をどのように考えたか。彼は、五つの要因を考える。

- (1) 記号自体、オグデン・リチャーズの場合と同様、物理現象である。

- (2) あの物理現象が、記号であるとして反応を示す主体。即ち、記号を使用し、解釈するものとしての解釈者。
- (3) 記号を与えられ、それによって一定の行動族の反応系列にしたがって反応する主体の中での準備を解釈内容という。

(4) 記号を受けた主体は、記号の指示する具体物との何らかの関係なしには行動は完成しえない。記号過程を終結させるためにはこの具体的な対象が必要になる。

(5) このような対象が何であれ、行動が完成するためには、即ち記号過程が終結されるためには、その行動の必要とする様々な条件が準備されていなければならない。かかる条件を記号の意義づけという。^(註42)

この論理には、オグデンリチャーズには見られなかった新しい二つの要因が加わっている。その一つは、モリスが行動主義であることから必然的に帰結される記号の解釈者の使用者の導入である。オグデンリチャーズの場合主体にあたる要因は、心理過程としてこの部分だけファンクショナルにしか考えられなかった。モリスの場合は、それに相当するものは解釈内容であり、新しくこの部分に主体者が実体化されて解釈者として入ってくる。もう一つは、記号の意義づけという要因である。オグデンリチャーズの場合、記号は、全く独立の物理現象であった。しかるに、モリスの場合は、対象の内包と外延を全体として表示する意義づけという属性を記号は持つことになる。記号は単なる対象自体を指示しているだけでなく、対象の持つ諸条件をも表示しなければならない。モリスは、これを、記号が、対象の持つ連関を表示しているのだと考えた。つまり、対象が、ある一定の脈絡の中で持つ論理的な連関性を単一の記号が表示しうることになるのである。記号が、このように対象の論理（対象の、環境の中で持つ連関性）を表示してはじめて人間は、行動のための準備に入ることが出来ると考えるのである。即

ち、記号は、対象（環境の論理）と、行動を関係づける媒介者となる。こうして、モリスの行動主義の立場は貫徹させられている。

さて、以上に概観したモリスの記号過程の基本構造の問題点を二・三あげてみよう。オグデンリチャーズのそれと比べるとたしかに記号過程に於ける主体を实体化して、解釈者とし、更に、記号の指示し、表示する対象の内包と外延を意義づけと定義することに依って、記号過程はかなり構造化してとらえられるようになった。勿論このことは、モリスの基本的な立場が行動主義であるからということなのである、そして、記号過程に於いて最も基本的な要因が、記号を解釈する主体と記号と、意義づけによって表示された環境そのものであることが正当に評価されたといえる。以上のことは、オグデンリチャーズの理論の持っていた根本的な困難性を克服している。その第一は、主体者たる「解釈者」の導入によって、オグデンリチャーズの持っていた論理の不徹底さを克服したことである。つまり、記号過程は、主体（ \parallel 解釈者）と、客体（ \parallel 環境）と記号と、それぞれ实体化され、この相互に独立した三者の相互作用であることが明確になった。主体は、所謂内面過程を含んだ独立者になった。第二には、「意義づけ」によって、オグデンリチャーズの場合には、独立した対象でしかなかったものが、一定の脈絡の中で意義を持つ対象となり、そのことで特定対象の全環境の中で持つ連関が指示され、表示される。

このような行動主義に基づく、一応の理論の包括性と同時に、心理主義に反対することに依ってオグデンリチャーズの理論の持っていたすぐれた点が見失われたという傾向が同時にある。それは、記号を主体と客体との媒介物と規定することに依って記号の基本的機能の一部を見失ったことである。オグデンリチャーズは、例の内面過程、内的連関を強調し、その独自の作用を認めると共に、かかる内面過程の独自性を保証するものとして記号を考

えていた。彼らは、記号体系そのものを考察の中に入れて来てはいないが、内面過程の独自性は、対象を反映している記号そのものによって認識作用、思考作用を發展させる。直接、行動にかかわらない記号の主要な機能が暗黙のうち想定されていたと考えることが出来る。しかし、モリスの場合、記号は常に行動にリンクされている。記号自体は本来的には常に行動とつながっているが、特定の記号がある状況の下で行動と直接には結びつかないで、一定の機能を果すことは容易に考えられる。後にふれるようにモリスも、必ずしも行動に直接結びつかない記号を否定しているわけではないのだが、問題は記号を、行動という側面に限定して視て行くと、もう一つの主要な機能の論理的・乃至は構造的基礎を見失うことになってしまう。

オグデンリチャーズの理論との対比で考えるとモリスの理論は以上のような特性を持っている。ところで、これを一つの記号論として見た場合、どのような点が問題になって来るか。以下、その点に簡単にふれてみよう。

第一に、先にのべたように、「意義づけ」を導入することに依ってたしかに、対象の構造性を、ロジカルにはその理論体系の中に組み入れることになった。しかしまさに、諸記号それ自身の体系的構造をそこから導出してくるという試みは成されていない。勿論、先にふれたモリスの基本構造の中には、体系としての複数の記号群の存在を論理的に結果させる萌芽は含まれていない。記号が指示する対象が、構造的連関の中での一構成要素であることにはなったが、まさにその構造的連関に対応する一定の記号群があって、それらの記号群が、その構造的連関の論理性を反映し、それを定着させているという理論的追求の緒口が設けられていない。モリスが記号の基本的機能のうちの一項目を見失った原因は、所謂内面過程を重視しなかったことと共に、このような記号群の構造性を充分に把握し得なかったからであるといえよう。

このことと関連して第二には、記号を操作し、使用し、解釈する主体と、記号との関連を充分に把握しえていないこと、つまりその一面的な連関性のみを考慮していることである。ということはつまり、主体にとって記号は常に与えられており、主体はその記号に反応し、行動の準備態勢に移る限りでの主体に過ぎない。ここにあるのは、記号↓主体という一方的な論理でしかない。しかし、この主体が人間であるとすれば、一定の対象に直面した主体が、何らかの情報伝達という意図の下に一定の記号群に翻訳し他の主体に伝達するという関係がもう一つあるはずだ。しかも、より具体的に考えてみれば、一定の対象に直面した主体には常に、既存の記号体系が存在している。対象は、主体によって直接にとらえられる場合と、主体の持つ記号体系を媒介にしてとらえられる場合とがあり更に実際には、この両者のとらえ方が複雑に組み合わされているのである。そこでは、主体内部での記号過程（勿論、何らかの外的な刺激によって励起されるのが普通だろう。）が問題とならざるを得ない。これもまた主体と記号の関係の仕方の一つである。更に、新しい記号の出現は当然の事ながら、主体と環境の新しい関係の発生を前提としている。つまり、記号は外界（≡自然史的過程）と主体の新しい相互作用の中からその相互作用そのものの認識的な基礎になるものとして生まれてくるのである。このように記号と主体との関係は、二・三重の論理関係に依って構造化されているのである。だから、例えばモリスは、記号は行動を促進させる要因とのみ理解しているのであるが、場合によって行動を遅滞させるということも起りうるのである。このように記号のはらむ複雑な論理的連関性が、記号が人間にとって認識や論理や思考過程での重大な役割を演ずることを可能にしてくれるのである。

第三には些細なことなのだが、解釈内容と意義づけの関係が明確でない。記号が意義づけという要因を持つことで解釈内容が決定されるのか、または、かかる意義づけとは全く独立に解釈が成立するのか判然としない。解釈内

容の相対的独自性が強調されるなら、これはまさに、オグデンリリチャーズのいう内面過程の独自性に近くなる。ということは更にいえば、意義づけなる要因の強調はむしろ不必要になるだろう。意義づけが重要であり、解釈内容が一義的に意義づけを持った記号によって規定されているとすれば、もはや解釈内容の独自性は喪失する。もし、両者がともに重要であるならばその間の関係が明白にされねばならない。総体としていえば、モリスの場合、五つの要因の間の関係の定着が不充分であり、このことは第二の問題点の所でも部分的にふれた通りである。

モリスの記号論の基本構造は、現代ブルジョア記号論の中で最も精緻に組み上げられている。少くとも、記号が所与であるという前提の下での記号過程は、一部分の破綻を除いてほぼ完全にまとめ上げられている。以上の問題点の列挙も実は、記号が所与であるという条件を承認しない上での批判であった。がともかくも、モリスの記号論は、現在の時点ではほぼ完成に近いという意味でコミュニケーション理論の中に大巾に導入されている。コミュニケーション過程は、前稿でふれた通り、まさに記号の運動過程であり、その限りでは、この記号過程の基本構造から、コミュニケーション理論の構成は可能であろう。

所で、モリスの記号論の主要な動機は、分析哲学に於ける分析の方法・道具としての記号の持つ基本的な性格の把握であった。その点に深く立ち入ることは、記号論とコミュニケーション論という課題とは直接的に結合しないと思われる節もないわけではないが、実は、その過程で述べられていることが、今後のコミュニケーション理論の構成と何らかの関係を持つだろうという推定を許す要素を持っていると考えられるのである。以下その論理をたどろう。

モリスが、記号の要素として取上げた意義づけには実は非常に重要な問題性があったのである。というのは、哲

学の方法論的反省としての記号論は、外でもない記号の「意義づけ」の理論を展開させることよってのみ可能になるからである。そこでモリスは、様々な文章の基本的な性格を考察して、全ての文章は四種の文章に分類しうる(註43)と考えた。つまり

- (1) 敘述的な文章
- (2) 価値評価的——
- (3) 命令的——
- (4) 形式的——である。

そして、記号の意義づけの仕方もほぼこの文の種類に対応するとして、そこから次のような記号の意義づけの種類を導出してくる。即ち、文の種類は一般に四種類なのだが、文には常に、主語となるべき特殊な一連の記号があり、これを一つの記号群と考える。(註44)つまり

- (1) 指示的記号（主語になるべき記号）
- (2) 敘述的記号
- (3) 価値評価的記号
- (4) 命令的記号
- (5) 形式的記号

である。これらの各種の記号群は、意義づけが異なることで異なった反応行動を有機体に促すことになる。「指示的記号」を与えられた場合、解釈者は、彼の反応を一定の時間的・空間的領域に向けることを準備する。「敘述的記号」

号」を与えられると、ある特定の性質を持った対象に於いて終結する反応系列が準備され、「価値評価的記号」を与えられると、特定の対象を選んで反応する準備が行なわれ、「命令的記号」を与えられると、ある特定の反応系列を実行する準備が行なわれる。^(註45)モリスは行動主義の立場で以上のように定義しているがこれを簡単にいえば、「指示的記号」は主語を意味し、「叙述的記号」は対象の持つ特定の性格を表示する述語であり、「価値評価的記号」は、対象に対して特定の主体の持つ情緒を表現する記号を意味し、「命令的記号」は、一定の行動を要求する記号である。「形式的記号」はこれらの記号自体の連関を行う記号である。

以上は、モリスに依れば、厳密には、記号の意義づけの分類である。つまり記号↓主体という論理の中で考える限りの記号の持つ行動とのかかわりあいには外ならない。しかも、モリスは、記号の意義づけと記号の用法は峻別すべきである主張し、そこで、オグデスリッチャーズ、メイス、ライヘンバッハ、ステイブンスン、ファイグル等々の記号の分類は、この意義と、用法を混同し妥当な記号の分類になっていないとする。このような主張はいう迄もなく、行動主義の立場から当然ではあるのだが、モリスにとって問題であるのは、記号↓主体の論理の外に、主体↓記号の論理のあること否定しえなかったからであろう。つまり、一つの主体が、他の主体の行動を支配する場合^(註47)に、記号がその媒介項となっていている事実が否定出来なかった。この要因は、彼の記号過程の基本構造論には潜在してもないものであって、むしろ、あの単線的論理を、各々の要素の所で、否定的に作用しているであろうところの裏側の論理によって二重化することではなければ考えられない要因である。どちらかといえば、半ば、唐突に記号の用法の問題が提出される。即ち、モリスに依れば「(それ故に)記号は、次のような使われ方をするであろう。有機体に対してある事柄について、の情報を与える。有機体に対して、対象の優利な選択を援助する。ある行動族

の反応系列を促す。記号により行なわれる行動（解釈内容）を統一的に組織化する^(註48)「これらの四用法は、順に、知識的 informative 価値判断的 valutive、命令的 incitive、体系的 systemic な記号の用法とする。^(註49) 勿論、モリスもこの外に様々な用法のあることを認めるが、それはあく迄も副次的な用法であって基本的な用法はこの四つの用法に限定される。すでに明瞭であるように、この用法は先の記号の意義づけと密接に関連している。

このように記号の意義づけと用法を区別したことの意味は、例えば、コミュニケーション過程では次のようになると、モリスは考えている。彼によると、コミュニケーションとは共通性 *commonage* の確立である。即ち、ある事柄について共有の財産をつくることである。^(註51) そして、使用された記号はコミュニケーションの手段となりこの手段によって共有となった意義づけがコミュニケーションの内容となる。そして目的を内包した手段が（≡用法）、記号の用法の分類によって定義されコミュニケーションの内容が、意義づけに依って定義される。したがってコミュニケーション論の課題は、この用法≡手段論と、意義づけ≡内容論となる。この点に関しては後にまたふねばならない。

さて、モリスの記号論の記号過程の分析は記号の用法及び、意義づけの分類にしたがって、学問領域の分類に至ってひとまず完結する。これは、記号論・意味論によって新しい統一的な科学論という構想を持っていたモリスに見れば、当然のことであった。それは、記号の意義づけの態様と、用法の分類をそれぞれ対応させたものであった。モリスは、個々の組合わせを、言語の特性の形態、即ち、言語形態 *Types of Discourses* と定義するが実は、これは一定の記号群の性格を意味し、そして、これを特定の学問領域に密接に関連しているものと考えたのである。（表を参照）そして、個々の学問領域での記号の用法と意義づけの特性を概括している。このことは、特定

主要な言語形態の実例

用法 意義づけ	知識的	価値 判断的	命令的	体系的
敘述的	科学的	創造的	法律的	宇宙論的
価値評価的	神話的	詩的	道德的	批評的
命令的	技術的	政治的	宗教的	宣伝的
形式的	論理数学的	修辭学的	文法学的	形而上学的

領域での科学的探究の中で、記号論・意味論的分析の占める位置を明確にしよ
うとする試みでもあった。より正確にいうならば、論理実証主義Ⅱ分析哲学の
伝統に従って、それは科学方法論の反省という意味では、各種学問領域での認
識は記号論・意味論的な分析に依存する以外にないとして、そのための対象と
しての一定記号群の性格の把握をするという試みでもあった。

そして最後に、前節でのべた記号論の三つの課題を提出し、そこで、全ての
知的・学問的・科学的知識の新しい統一の原理を提出するものとして記号論・
意味論を定義づけるわけである。^(註53)この点については前節でふれたのでここでは
これ以上ふれない。最後に、以上でのべた記号論の体系の問題点をひろってみ
よう。

第一にまず、強調しなければならない点は先にふれた、記号の基本構造か
ら、その後の記号論の発展が、論理的に帰結されないということであろう。つ
まり、記号過程の基本構造の中に、後の記号の分類や、その機能を導出すべき
要因が定着していないということである。だから、意義づけを發展させた記号
の意義の形態論に於いても、記号に関する現象の中に、かかる論理を成立せし
める側面があるという論理の展開の仕方になる。記号の用法論に至っても全く
同様である。

第二に、この点に関連して問題になるのは先にもふれた事ながら、モリスが終始、行動主義的な見解の下で、論理を展開しているという点にあるだろう。それは、パヴロフの理論からの展開としては当然である、ともいえるのであるが、本来、パヴロフの理論には行動主義的な傾向が潜在していてそこから、行動主義的な傾向を一方的に重視しながら展開すれば、かかる論理体系にならざるを得ないということである。記号過程の基本構造の中に後の論理を必然的に予想しうるまさに矛盾的要因を設定するという操作が必要であったのではあるまいか。そのためには、行動主義という立場がその障害になったといえよう。行動主義による論理を否定的に媒介するある意味での歴史的論理の如きものが、要請されるのである。尤とも、オグデン^(註54)リチャーズにしても、モリスにしても、彼らの記号論は、記号発生、言語発生論理であるという批判を受けざるを得ない学問的な状況^(註54)の中ではそれを期待するとは無理というものだろう。

第三に、この記号論のコミュニケーション理論とのかかわりありであるが、この点は後でふれるので、簡単にいえば現在の全社会的コミュニケーション過程に於いて運動する諸象徴・記号が、分析され、分類されている点と、理論構成のための方法論が、一種の経験科学方法論として提出されている点、及び、対象と方法を結合させた、コミュニケーション過程に於ける手段と、その内容(≡意義づけ)を問題とすべきであるとした点は、ある意味でモリスがこの記号論を主張した時点でのアメリカ・マスコミ理論の課題を要約し、しかも、その方法論的基礎を提出したということになるろう。

(Ⅲ) 記号論とコミュニケーション論——記号論の、コミュニケーション理論に対する貢献は、先にふれた通

り、ほぼ二つの領域について考えることが出来よう。即ち、コミュニケーション理論の対象領域に関しての理論的寄与と、方法論の検討に役立つという二点である。戸坂潤をまつ迄もなく、対象に関する考察と、方法論の検討は密接に関連しているので、これを別個に論ずることは本来的な困難性を持っている。以下ではこの二点を別個ではなく、多少重複する所があることは致し方がないと考えて概括してみようと思う。

まず、オグデン・リチャーズから見ていこう。勿論、彼らが、その記号論がコミュニケーション理論に何らかの寄与をするという予想を持ったとは考えられない。しかし見逃し得ない点は、彼らが部分的にでも従来のブルジョア言語理論の危機、即ち、認識論の基礎的実体としての言語の理論の危機を実感していたことは先に述べた通りである。だから、彼らの記号論が、コミュニケーション過程に於ける最も基本的なユニットである記号の基本的論理を提出し、記号過程（コミュニケーション過程の非常に重要な一環を構成している。）の機制の一部を明瞭にしたことと共に、記号過程の持つ認識論的意味を主体の内的な過程に於いてとらえたことは、コミュニケーション理論の立場から見ても非常に大きな貢献であると考えられよう。というのは、勿論、彼らが、その記号論を提出しただけと後になってから、この問題が現われて来たという時間的關係はあるにしても、現代に於ける様々な社会的変動とマス・コミの過程、それと表裏一体をなす全コミュニケーション過程の変化等から、現代に於ける認識の問題は新しい側面を露呈して来たという事実があり、記号過程と現代に於ける認識論の問題は非常に大きなかわりあいを持たざるを得なくなったのである。

現代にあっては、人間にとって有意味である外界の情報は、常に一定の記号の体系的集合体として存在する。正確には人が授受する情報の中で、記号の集合によって構成されるものの比率が非常に大きくなった。そこで、この

記号及び、記号の集合体の持つ現代的特性に関する一種の危機感はずりッパンによって提出されたといえよう。^(註56)これに対して、かかる規定性を持った記号及び記号群の受容過程に於ける問題点が、心理学のそれとは一応別個に（勿論心理主義的にはあるが）記号論の立場から提出されたのである。そしてその記号論は、最近の脳生理学に於ける高次神経過程がある意味で記号過程であるという理論的成果をふまえながら登場したのである。

マス・コミ理論及び、コミュニケーション理論は当初はある意味で大衆操作の理論として自己を形成して来るが、それはこの課題に直接つながるものとして直ちに、記号の運動過程と認識の問題に到達する。しかも、ラスウェルによってマス・コミ過程が、五つの要因によって成り立つとされてより、各要因に記号過程が、実に根強く潜んでいる事実がわかった。例えば、しばしば指摘した通り、その受容過程の理論は、重要であるし、又、例えば内容分析にあっても、所謂象徴理論による分析（ひいてはそれはまさに分析哲学に於ける命題分析の如き精緻さにも達する）が不可欠になってくる。そして、更には全コミュニケーション過程を何段階ものコミュニケーションの流れの複合されたものであるという考え方に到れば、その各段階での記号の存在形態の理論化という点及び個体内に於けるある種のコミュニケーション過程は記号過程でとらえ得るという点でも、記号論は、可能性として新しい貢献をなしているのである。

オグデン・リチャーズの場合、記号過程に於ける主体の内的過程のメカニズムの一部を明確にしたという点と、その内的過程の外的過程からあるいは外在的要因からの、相対的独自性を確認したという点で一つの意味がある。それ自体としては誤まった理論ではあるが、例えばマス・コミ過程でのディス・ファンクショナルな現象の摘出に相対的な有効性を持っている。換言すれば、現代に於ける人々の認識の病理をえぐるための理論的根拠の一部

を提出したということである。

勿論、彼らの理論が直ちにコミュニケーション理論の一部に成るといのではない。ここであらためて指摘したことは、現代のマス・コミ論の理論追求の結果が、記号論に逢着し、しかも記号論が、マス・コミ理論の体系の持つ隘路を打開する一つの方向を提出したということである。そして更にいうならば、マス・コミ乃至は、コミュニケーション過程の社会的意味の肥大化という現代的状況の中で、コミュニケーション理論と記号論が癒着することに依って現代に於けるブルジョア認識論が大巾に前進したという事実は否定出来ないと思う。^(註57) 別な表現をすれば、コミュニケーション理論は、記号論を導入することによってその対象領域をある面では拡大ししかも別の面で対象領域の体系化を進めたともいえる。

以上のことは基本的にはモリスについても同様である。ただ、彼の場合、一方で常にコミュニケーション理論を意識しながら自らの理論体系を構築したという意味で、両者の関係は密接になっている。しかし、モリスの場合はそれだけではない。彼は、記号が社会と個人にとって如何なる意味を持つかという問を^(註58)発する。従来、この課題に対して、心理学者、言語学者、社会学者文化人類学者がそれぞれの視角からとり組んでいるが、彼は記号論、意味論の立場で新しい概念を以って新しい理論体系によって応えることを主張する。勿論、モリスは新しい理論を提出しているわけではない、従来の各学問領域に於ける記号論の立場に近い成果を、記号論の立場から評価しているにすぎない。むしろ、今後の課題であるとして、問題の整理と解決のための緒口を提出しているだけである。このことは、全く逆の見方が出来ると思われる。というのは、すでにモリスの理論の提出以前に、例えば、近代政治学の領域では象徴分析^{シンボル}が、重要な学問の分野になっていたし、コミュニケーション理論では内容分析で一定の成果が

提出されていた。だから、モリスはかかる経験科学に於ける新しい動向の総体としての意義と、その統一性のためにかかる一項を設けてそれを社会と個人に於ける記号の意味という間で提出したともいえるのである。

更に、モリスが、オグデン＝リチャーズと著しく異なる点は、例の記号論・意味論の三つの課題を提出している点である。いう迄もなく、これは新しい論理学を記号論の検討から展望してみようという試みである。それはある意味では方法論の検討という問題を含んでいる。コミュニケーション理論も、この全体的な論理構造の中でとらえられているという点でモリスが、新しい経験科学の置かれていた状況の中で考えていたことを示すとともに、コミュニケーション論をブルジョア経験科学の中で記号論を媒介にしながら正確に位置づけるという意図のあったことを物語っている。

以下くりかえしになるが、簡単に、コミュニケーション論と接続するであろう諸点をあげてみる。第一に、記号過程の基本構造は、オグデン＝リチャーズの場合と同様、コミュニケーション過程の主要な原因である受容過程の分析に関係してくる。勿論、受容過程にあずかる特定の主体の置かれた歴史的条件は入って来ないという難点はあるが、抽象的な基本構造は明らかになる。そして、このことは現代ブルジョア認識論の基本的な前提にもなるであろう。第二には、記号の意義づけの理論であるがこれは、記号の用法の理論と共に、コミュニケーション内容の分析に、そのまま直ちに役立つといえよう。無論、内容分析が、総体としてのコミュニケーション理論の中で如何なる重要性を持つかは別個の問題である。更に、記号の用法の理論は、一定の意味内容を持った情報を如何に有効に伝達するか、あるいは客観的に、現在ある特定の伝達機構がファンクショナルであるか否かの理論化を可能にしてくれる。又モリスは、この部分の理論の概略を提出しているにすぎないが、この辺をより深めることに依って様々な

媒体の様々な記号・象徴、映像の理論化が展望出来るのではあるまいか。^(註59)

第三には、これと関連して、モリスは、コミュニケーション過程を、記号論の立場から、コミュニケーションの手段と、コミュニケーション内容の二つの要因からなると考える。いう迄もなく、手段論の實質は記号の用法論であり、内容論の方は意義づけ論になっている。モリスの理論だと手段論は媒体論メディア論の一部を含む形になっている。コミュニケーション過程にかかる二要因からとらえることは、先の記号の基本構造に於ける彼の理論を別のレベルで再現したことになるのだが、やはり、このような考え方は問題であろう。というのは、記号が用いられる場合の、用いる主体と記号の関係が全く捨象され、ここで課題となっているのは、コミュニケーション過程のまさに半分である。つまり、またしても単線の論理でしかないのであるが、モリスのこの提案はその限りで有意味ではある。

最後に、くりかえしになるのであるが、最近学問の各領域にコミュニケーション理論的側面が著しく現われて来ている。これは、特定領域の各分野にすら言えることでもある。そして各領域各分野のコミュニケーション論を横断的に取り出し、まさにコミュニケーション理論として体系化することが、現実的な意味で、有意義であり、尚又、各学問領域・分野に於いて貢献する所大なりとすれば、かかるコミュニケーション論の散在を統一する理論的基礎に、モリスの発つた「社会と個人にとって記号とは如何なるものであるか」という問題意識を持つ記号論が考えられる。少くとも現状では、ブルジョア科学の側では記号論を唯一の手がかりとして考える以外にはないのではなからうか。

さて、モリスのかかる理論的業績は極めて画期的であったが、コミュニケーション論に関する限りでその後の展開に簡単にふれる。それは、オスグットによるモリス理論の修正である。^(註60)モリスの記号過程の基本構造は受容の個

体の持つ諸条件を無視しているという欠陥があった。先にはそれを主体の置かれた歴史的・社会的条件の捨象という形で批判したわけであるが、オスグッドはそれをモリスの準備、*disposition* 概念の不備という形でとらえる。全く同一の条件で同一の記号を受容した時に起る行動の多様性の根拠を準備の概念を明確にすることに求めたのである。オスグッドは様々な実験もやってみようとしているが、準備とはまさに個体内の過程であり観察は出来ない。内的過程を外在化してとらえることは、何らかの単純化なしにはありえないし、また、恣意的たらざるを得ないだろう。ここで注目すべきことは、オグデン^(註61)リチャーズ等の心理主義的傾向を媒介にしながら、モリスの理論に新たな展開を加えようとした事実である。このことの意味とともに更に、従来、ブルジョア哲学等では全く認識不能と考えられていた主体の内面に「科学的」な探究を向けて来たという事実に注目しなければならぬ。ある意味では認識論再建のための行動主義の部分的破産の宣言であると同時に、認識論が更に新しい領域に極めて特殊な方法でアプローチを試みているという意味をも持っている。つまり、オスグッドは従来の心理学の持つ様々な成果をとり入れながら、それらの心理学とは異なった視角から人間の内面に迫ろうという意図を持っている。

勿論、オスグッドが、モリスに於ける主体の置かれた歴史的・社会的条件の欠陥を準備なる概念の規定性の不備に矮小化したことには、致命的な欠陥があることは事実である。オスグッドは、準備とは、個体の生活史に於けるコミュニケーション活動の堆積であるとして心理学的にしか見ていない。ともあれ、オスグッドがモリスの大きな欠陥の一つに対して解決の方向を指示した事実は重要であろう。

外に、具体的な内容分析にモリスの理論が大巾に導入されている事実はあるが、これらは、コミュニケーション理論の展開に直接に寄与しているという程のものではない。

総じて、モリスの理論の中に潜在しているプラスの部分の展開は殆どないといってよい。むしろマイナスの部分の肥大化の方が顕著である。オスグッドもその一つであろう。

以上でブルジョア記号論の基本的な構造と、コミュニケーション理論との接点の概略を終る。次の課題は、現段階でのマルクス主義記号理論の意味を検討することである。〔未完〕

- (1) プラグマチズムの祖、パースは、記号論に基づく、命題の分析を主張している。このことは後にふれるのであるが、彼の「プラグマチズムの守則」の中の一項にそれが入っている。
- (2) 現在、如何なる学問的・思想的立場にしる、その学的体系の中には、部分的に、記号論Ⅱ信号論が含まれねばならないと私は思う。以下、「現代信号論」ということばは、思想的立場の相違をこえたあるべき「信号論」をさす場合であり、特に、ブルジョア科学に於ける信号論をさす場合には、ブルジョア信号論現代記号論等のことばを使うこととする。
- (3) 現在、ブルジョア哲学の中で、分析的方法をとるものを全て、分析哲学と呼ぶ傾向がある。たしかに後にふれる論理実証主義にしても、分析的方法をとるのであるが、ここでは狭い意味の、つまり、特に、その源流を英国に求めることの出来る立場の哲学を分析哲学という意味で使っている。具体的にいえば、ケンブリッジ学派からオックスフォード学派に至って現在のアメリカ記号論の一部に大きな影響を与えているものである。
- (4) B. Russell, "Introduction to Mathematical Philosophy 1920 邦訳「数理哲学序説」二五六頁。
- (5) フレーゲ、ペアノ、プール、ジェボンズ等々の数学者はラッセルに非常に大きな影響を与えている。彼らは等しく、数的なものを論理学に還元すること、あるいはまた、論理的なものを数的なものに置換するという試みを行っている。特にプールの代数は、現代の計算機に大きな貢献をしている。
- (6) 「現代の分析的経験論は数学と強力な論理技術の発達を取入れてる点で、ロック・バークレイ、ヒュームの経験論とは

異なる」といつている。邦訳『西洋哲学史』

(7) ラッセルは、ウィーン学団とよばれる論理実証主義の人々に大きな影響を与えている。ラッセルの理論の特質は論理実証主義の所で再びくわしくふれる予定なので、ここでは簡単に、彼の哲学の課題にふれるだけとする。

(8) ムーアについては、直接文献にあたる余裕がなかったので、以下の邦文文献から、要約した。講座近代思想史Ⅶ疎外の時代
(1) 大森荘蔵「分析哲学」弘文堂、講座現代の哲学Ⅱ分析哲学有斐閣永井成男「分析哲学」弘文堂、吉村融「現代イギリス哲学の動向特に分析哲学の展開を中心にして」哲学雑誌一九五六年十二月、

(9) 前に同じ。

(10) 分析哲学の問題性を、まさに問題意識として出発したのはウィーンに於ける論理実証主義であった。問題意識が、極めて鮮明でしかも、実質的な成果という点になると、むしろ彼らの最初の手がかりとして、導入したラッセルの成果からいくらかも出ることには出来なかったが、まさに、問題のとらえ方で彼らは尖鋭であった。ある意味で、大陸特有の観念性の一つの現われであるが、彼らが、ラッセルの観念性に親近感を持ったことが、ラッセルの大巾な輸入の一つの原因とも考えられる。英国に於ける分析哲学では未だ曖昧であった、この理論の諸特徴は、論理実証主義になっていい意味でも、悪い意味でも非常に明確に現われてくる。それ故に、現代哲学の動向の中で、必然的に記号論が、析出させねばならなかった原因もウィーン学団の展開の過程の中で、より一層明確になる。したがって本節の主要な課題は、論理実証主義の思想性を追求されることになるだろう。

(11) 戸坂潤「科学論」(上)一頁、戸坂潤選集 伊藤書店昭和二十一年。

(12) 前記の論文は、昭和四年に出版されている。ここでは未だ直接にマルクス主義の立場は出ていない。リッケルトの科学論に親しみを感じているふしがある。

(13) 歴史的に見て、方法論、科学論の反省検討は、思想的な危機から出発している。歴史を先取する思想学問も、また、古い体制に依存する思想・学問も、この点では同じである。しかし、新しい学問が、常に戸坂のような意識から出発するのに対して、古い学問は、ここでのべた第三の出发点を持っている。しかし、その場合も、自然科学の一定の発展が、社会科学にかかると反省をうながすという事情は変らない。更に又、かかる反省が、方向こそ違え理論に於ける有効性を回復するとい

う事情も変らないように思われる。

(14) マッハは、物は感覚に基礎をおく、経験の複合体と考えた。まさに心理的な諸要素から物理的な諸要素を再構成しようとしたのである。一方で彼は、すぐれた物理学者でもあったわけで結論的にはある種の唯物論者になっている。つまり、マッハは、二十世紀初頭に於けるブルジョアの科学論の混沌を一身に集めていたといえよう。この意味で、ウィーンに於ける論理実証主義が、マッハから出発したことは非常に示唆的である。

(15) この意味は、ブルジョア科学論の混乱を少くとも主体的に解決しようという動きが、あつたという程のことである。後にふれるようにマルクス主義に対しても極めて、プログレッシヴな立場をとっている。しかし、ここでいうプログレッシヴという意味は、歴史を先取するということではないのは勿論である。

(16) 特には先にあげた記号論理学等に集約されつつあつた新しい論理学、数学の原理論である。論理学を媒介しながら、自然科学と人文科学の新しい関係を見出そうという試みであるわけだが、この場合の論理学はある意味で、自然科学にひきよせられた論理学であつて、尚且、社会科学・人文科学の論理学が、残余として残る事実が予想させる。端的に言えば、論理としての弁証法をいかに克服するかという課題が残る。

(17) ジンメルが厳しい思想的学問的追求の結果到達した『生』と論理実証主義が提出した『生』とが、概念として、いや正確に言えば全論理体系の中で占める位置によつて区別しうるか否かは問題であるが、ブルジョア科学が説明不能の部分を『生』なるコトバに集約し、理論追求を中止し、不可知論におちいつて行く事實は、興味深い。

(18) くわしい説明は省略するとして、先の註でものべたように、マッハは、部分的に唯物論を導入しながら、ブルジョア科学論の再編成の方向を示し、しかも、以後、彼の思想的系譜に連る論理実証主義は、依然として、ブルジョアの有効性を失っていない。だからレーニンが、マッハに危険を看取したことは、一方で運動論的な事情が考えられるが、同時にいち早くその思想の持つ、性格を見てとつたということも意味しているであろう。

(19) 前掲、ウィーン学団パンフレット参照。

(20) ラッセル「数理哲学序説」参照。

(21) ウィーン学団パンフレット参照。

(22) 後にカルナップについてふれる場合に、重要な概念になるわけであるが、ここで筆者の使う意味は、一般に論理学は事象の持つ論理の構造の理論化を課題とする。所が、論理実証主義はかかる方向で、構造化された論理について何らかの分析を試みるという形で、論理学の『論理学』的な性質を持っている。つまりメタ論理学とはそういう意味内容を持つものとしてここで使った。

(23) 基本的命題は、記号論理学の影響が著しいが、その命題の種類は、基本命題、基本命題函数、主張命題、命題函数の主張命題、否定命題、選言命題である。各々の命題については、はんさになるからここではふれない。

(24) 現在のすぐれた計算機の論理演算のメカニズムにはそのまま記号論理学の論理が導入されている。

(25) 形而上学・マルクス主義的論理学・哲学等の形式論理的に言えばまさに無意味になる様々の命題を排除しようとしたこと。

(26) L. Carnap "The logical Syntax of Language."

(27) カルナップはその著 "Introduction to Semantics" で、論理学が意味論の領域に入らざるを得ないことを説明している。

(28) タルスキーの論文はドイツ語で書かれてあり直接あたることは出来なかったが、註(27)の著作の中ではタルスキーが非常に重要視されている。

(29) この意味で、モリスはパース、ジェイムズ、ミード、デューイと至るアメリカプラグマチズムの思想的な系譜の中の一人と考えてよいと思う。

(30) 後にふれるモリスの記号の定義に明白に現われている。

(31) C. Morris, "Sign, Language and Behavior" VII, The Scope and Import of Semantics 参照。

(32) 少くとも、マス・コミ理論の中の一分野としての内容分析 Content Analysis には、モリスの記号論は有効であろうといわれている。又、政治学に於ける象徴分析にはすでにしばしば使われている。

(33) G. H. Mead, "Mind, Self and Society" p. 54 の個所を引用しながら、モリスはミードはすぐれて「言語と個人」「言語と社会過程」の問題をあつかったとしている。ミードのいう有意味のシンボルとは、実は一定の集団内で、共通の意

味を持つ *consign* だとしている。そして又、かかるシンボルの原形を *シード* が、人間の *gesture* に求めていることを指摘し、そこに *シード* の記号論の基本的論理を求めよう。C. Morris *op. cit.* p. 39

(34) C. Morris. *op. cit.*, p. 93

(35) E. C. Moore "American Pragmatism" p. 42

M. G. Marpley "The Development of Peirce's Philosophy" p. 88

(36) 先にもふれたことなのだが、政治学・法学・社会学等々での最近のシンボル分析・命題分析の傾向は一つの現代的特徴といえるのではなからうか。

(37) あるべきコミュニケーション理論にとって記号論が、有効か否かという問題の外に、仮に有効であるとして、如何に、これを導入して行くかという困難な課題がある。

(38) C. K. Ogden I. A. Richards, "Meaning of Meaning" p. 10~11

(39) *op. cit.*, p. 57

(40) *op. cit.*, p. 149. p. 88

(41) C. Morris. *op. cit.*, p. 10

(42) *op. cit.*, p. 17

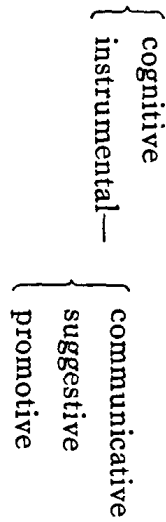
(43) *op. cit.*, p. 60~62

(44) *op. cit.*, p. 66

(45) *op. cit.*, p. 66

(46) *op. cit.* p. 94 ここで各論者の記号の種類の種類に簡単にふれておこう。いう迄もなく、モリスを中心に記号論を論じた者は大変多い。記号論がブルジョア哲学・認識論・論理学等々の分野と関連させられながら論じられるわけであるが、モリス自体の記号論をとってみてもあく迄も、試論の域を出ないことから、直ちに推測しうるように、論者の間には微妙な差がある。まだコンクリートな定義・理論はないといえる。例えば、S・K・ランガアは、まず記号を *sign* と *symbol* に分ける。前者は、主体と対象を媒介し、行動の対象を指示する働きをし、後者は行為自体を指令する。所で、*symbol* は更に

discursive symbol と non-discursive symbol に分かれる。前者は時系列を持って並ぶ記号であって、一例えば言語はこれに属するとした。後者は空間的に、要素が配列されている場合にそれらを、空間に再現する地図のようなものをいうとする。(ランガア「シンボルの哲学」岩波書店参照)ランガアの主要の関心の一つは、論理学としての記号論の他に、芸術論に記号論を如何に適用するかということである。更に、この記号の分類を、芸術論に有効に展開している。ランガアの分類も基本は二分法であるが、これと同じような分類は、モリスによると、ライヘンバッハがそうである。図で示する。



このような分類は、外にファイグも採用している。モリスはこれらを本文でのべたような視点から批判をするわけであるが、モリスの真意はおそらく、かかる分類からは、論理学のための一貫性のある記号論たりえないという点にあるのだらう。

- (47) モリスには、主体記号→主体という記号過程のサイクルを総体として論ずることはなかった。
- (48) op. cit., p. 95
- (49) op. cit., p. 85
- (50) 意義づけの分類に現われた「指示的記号」はいずれの場合にも、同一の機能を果たすと考えてよからう。
- (51) op. cit., p. 118
- (52) op. cit., p. 125
- (53) op. cit., p. 217
- (54) たとえばアーバンは W. M. Urban, "Language and Reality" の中で指摘している。
- (55) 少なくとも、内容分析論・受容過程の分析視角に対して、モリスの貢献は大きい。しかしそれだけでなく例えば、内容分析論はもはや、モリス的な記号論による分析の精緻化しか、発展の方向を残されていなかったという事情もある。
- (56) リップマンの古典的な著作「世論」はかかる問題意識に終始させられているといっても過言でなからう。

(57) 本稿の次の部分ではソヴェイトに於ける最近の記号論にふれるわけであるが、最近、記号論関係の論文がかなり多くなっている理由の一つにブルジョアの認識論（当然のことながら、多くの正当な部分を持っている）に於ける記号論の位置が無視しえなくなったことが考えられる。

(58) *op. cit.*, 188

(59) 先にふれたランガアの記号論などは、象徴論・映像論に直ちに連結される要素を持っていると考えられる。この領域は、正確に言えば記号論の一番未開拓の部分であり、この点に関しては他の思想体系の中によりすぐれた成果があるのではあるまいか。問題は記号論の一部がこの領域をも包摂しはじめている所にあるだろう。

(60) C. Osgood, "The measurement of Meaning," 参照。

(61) このことはムーア等が、行っていた意味の分析に非常に近い。ただ、ムーアらは、言語化された命題の意味を検証しようとしたのであるが、オスグッドは、記号対主体という行動主義的な力動関係の中で記号の持つ意味を、ある意味で、量化してとらえてみようとしたという点で異なっている、がこのことは、論理実証主義に於いて厳しい命題分析の結果、排除された、それ自体としては論理的な分析にたえられない命題が、日常的な文脈の中で有意味であるならば何らかの復活が行なわれるべきだという主張と対応していると考えられる。